
せんぱいっ！

とけけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せんぱいっ！

【Nコード】

N2333B

【作者名】

とけ

【あらすじ】

念願の高校生活。が、それは先輩にふりまわされるドタバタな毎日。すごい変人で、すごく可愛いくて、ちょっぴりおませな先輩と織り成すハイテンションスクールラブコメディーのはじまりっ♪

episode 1 先輩と俺

夢の高校生活。ずーっと子供の頃から憧れてた。大人と子供の中間であるこの微妙な時期はすばらしいものだと思っていた。

俺は永谷 建人。16歳の高校生。現在青春真っ盛り！恋に勉強に部活に追われる日々を送る予定だったんだけど……。なぜか先輩に追われる日々。コトの発端は入学したての頃だった。

春

俺は夢と希望を胸にこの県立清光学園へと入学。学力が普通で距離も普通の高校といったらこの高校が一番だった。そして、ちょうどあれは2週間くらいが経った頃。

「建人！そろそろ部活は決まったか？」

俺は無我夢中で学校唯一の楽しみである弁当を食べていると入学してすぐにできた友人。大橋 秀に話かけられた。

「ん、ああ。結構いろいろあって悩んでるんだよねあ」

この清光学園に存在する部活は全部で56個。同好会もあわせればもっとあるだろう。これらから一つの部活を決めるのは至難の業だ。2週間経つても俺は部活を決められないでいた。

「秀は？もう決まったのかよ？」

「いいや、まだ決まってるない。そこでだ！今日の放課後ちょっと部活見学にいかないか？」

「そうだな。そろそろ俺も決めたかったし」

こうして俺らは放課後に部活見学へ行くコトになった。

その日の放課後

校内ではありとあらゆる部活が切磋琢磨に活動していた。みんな青春してるんだなあ

俺たちはまず『青春の汗を流す』というテーマのもと運動部をまわることにした。

30分後

「ダメだな・・・」

「全部練習がきつ過ぎて話にならん」

と、あつという間に運動部はすべて却下。てか、流して青春の汗がかけるわけがない。俺たちは次に文化部を見てみることにした。

「文化部も結構あるよな」

くくく

突然、秀のケータイが鳴った。秀のケータイを見る顔が険しくなっていく

「わ、わりい。今日、うちの用事があるの忘れてた。建人、悪いけどあとは一人でまわってくれ」

用事があったんですね。

秀はそそくさと帰ってしまった。こういうときの友は異様に動きが早い。結局俺は一人で部活をまわることになってしまった。

吹奏楽部とかは楽譜が読めないから無理だし、演劇部は恥ずかしいなあ・・・。

文化部の大半を却下してしまった俺。何をやってもいまいち不器用

な俺は自分にあつた部活を見つけれない。気が付くと日が暮れてきている。今日はここらへんにするかと思ったとき俺はある部屋を見つけてしまった。

『お祭り部』

ドアにはそう書いてある。なんだか楽しそうじゃん。よくわかんないけど。

その一瞬の考えが命とりだった。

ガチャ。ドアを開けた俺。一瞬、シャンプーのいい匂いがした。と、次の瞬間俺は首に腕をかけられていることに気付く。

「な、なんだ！」

「ようこそ、我がお祭り部へ！」
女の子の声がした。

急いで腕をふりほどいて見てみるとやっぱり女の子が一人立っている。肩ぐらいまでに伸びた髪。そのを片方をリボンで結んでいる。目は大きいし、肌もすごく綺麗。おまけにスタイルもいい。ちよつと幼い感じもするけど。これは世のいう美少女！いかにも元気ですって感じもする。校章を見るとラインが二本。先輩の証だ。ちよつとラッキーなんて俺は思ってしまった。

これが俺と先輩の出会いだった。

「あ、あの・・・」

「あ！詳しいことは中で聞くから！さ、入って入って！」
完全に向こうのペースに乗せられた俺は言われるがままに部室（？）
へと入っていった。

部屋の中は部室と言うより住居に近い。部屋の真ん中には机が置いてあって椅子も二、三脚置いてある。ガスコンロやテレビまで置いてあってちょっとした生活スペースといった感じだ。俺はとりあえずパイプ椅子に座らされた。

「では、まず自己紹介！僕は中川 唯。君は？」

なんでこの人女なのに自分のこと【僕】って呼ぶんだ？てか展開早すぎだよ！いきなり自己紹介はじめるなって！

「あ・・・俺は永谷 建人。今年入学してきました。」
思わず反射的に自己紹介してしまう俺。

「へえ！一年生？で、入部動機は？」入部動機？なんか勝手に話すすんでる気がする！俺、入部するのか？おかしくないかその展開はっ！

「あ、あのまだ俺・・・」

俺は相手が先輩ということもあって丁重にお断わりをしようとした。
「まあ動機なんてなんだっていいよね！ようこそお祭り部へ！」

うわっ！この人話聞く気ねえよ！なに場をしきってんの？ちょっと空気読んで！

「あの、まだ俺、入部するなんて言っていないんですけど・・・」
俺はきつぱりと断った

「え！入部・・・してくれないの？」
にこにこ笑っていた先輩が急にしゅんとなる。そんな顔するなって俺の目をじーつと見つめる。見るな！見るな！
顔がぐつと近づく。さっきのシャンプーのいい匂いがする。

「い、いえ・・・あの／＼」

やばい。顔近いつて！ろくな女性経験のない俺は完璧にパニくった。

「僕とじゃ・・・いや？」

上目づかい。甘い吐息。先輩の右手が俺の頬に触れた。

ほわああああ！自我崩壊するう！誰かこの人止めて！あ、やっぱ止めないで！

俺は一人で自分と戦っていた。

そして・・・

「・・・入ります」

言っちゃったよ！俺、今確実に言っちゃったよ！でもこれって正当

防衛だよ？ね？

「やったあ♪これで部員二名だね！」

うわ！話が勝手にまとまっちゃったよ！てか二名？ってまさか！おい！俺と先輩の二人だけ？このアマは！

「じゃあ、役職、決めなきゃね！僕のマネージャーと、世話係。どっちがいい？」

勝手に話進んでるよ！それ役職じゃないし！てか部活関係ねえじゃん！

「あの・・・もっと普通の役職がいいんですけど」

「えゝ？仕方ないなあ。じゃあ君は・・・」

再び俺の首に絡み付く腕。俺のつんつん頭をくしゃくしゃ撫でながら、一言

「じゃあ君は僕の弟ね！たっぷり可愛がつてあげるから覚悟してね！けんちゃん♪」

なんの覚悟をすればいいのでしょうか？

こうして俺の劇的先輩生活はスタートを切った。

episode 2 先輩と手作りケーキ

「今日の授業はここまで！みんな気を付けて帰るように」

先生の話が終わると同時にみんなはクラスをあとにする。みんな自分の放課後を楽しみにしているのだろう。高校生の放課後は十人十色だ

「建人！昨日はゴメンな！で、いい部活は見つかったか？」

秀が昨日突然帰ったことを今更詫びる

「・・・見つからなかった」

たぶん、このときの俺は声のトーンが低かっただろう。

「そつか、じゃあ今日も見学に行かないか？」

「・・・ゴメン！秀！」

俺は勢いよく席を立つ

「おい！待てよ建人！」

制止する友を見捨てて教室を飛び出た俺。許してくれ。俺は！俺はあ！

俺は永谷 建人。 16歳。 お祭り部、役職 弟

今、俺はあるドアと睨めっこしている。ドアにはお祭り部と書いた看板がぶら下がっている。

「・・・何かの間違いかもしれない」

昨日からそう自分に言い聞かせ続けてきた。

そしてそれを確かめるべく俺は勇気を振り絞ってドアを開けた。

「ハロー♪けんちゃん！」

間違いではなかった。そこには確かにあの美少女が立っていた。

「唯先輩・・・こんにちは・・・」

がつくり肩を落とす俺

「もう！けんちゃん遅刻だぞ！もっと早く来てくれないと」

「す、すいません・・・」

「僕は寂しがりやさんなんだから早くきてよね♪」

「は、はい」

俺はこの唯先輩には逆らえない。確かに顔は最高だけど。なんか違う気がする。

「で、なんで唯先輩はエプロンなんて着てるんですか？」

唯先輩はなぜかエプロン姿だった。それはそれなりにぐつとくる何かがあってよかったんだけど。

「ケーキ焼いてるんだぁ♪けんちゃんの歓迎パーティーしなきゃね」

いったいこの先輩は何を考えてるんだろうか？てか、ケーキくらい買ってくればいいだろ

「僕のケーキはおいしいんだよ。楽しみにしててね♪」

あくまで手作りに意味があるのだろぅ。なんか楽しそうだからその

ままにしよう。

俺は部室に一つしかない狭い窓から外を眺めた。見える景色といったら普通の住宅風景でべつにこれと言って物珍しい光景はない。校庭から運動部の掛け声が聞こえる。

「はぁ・・・俺、どうなっちゃうんだろうな」

まあ得体の知れない部活に入ってしまったのだから不安にだってなるだろう。てか、そもそもこの部活って何やる部活なんだ？

「あの、唯先輩？この部活の活動って・・・」

早速、質問を投げ掛ける俺だったが

「できたぁ！」

聞いてないよ・・・てか聞こえてないのか？俺、無視か？それとも聴覚に異常があるのか？

「けんちゃん、できたよ！できたよ！」

唯先輩は今にも飛んでいってしまいそうなくらいはしゃいでいる。子供じゃないんだから・・・。こんな姿を見ているといまいち怒る気がしない。

唯先輩はうれしそうにケーキを机の上に置いた。

「あとはコーヒー。コーヒーっ」と

「あ、先輩。俺がコーヒーいれますよ」

後輩としてのせめての気遣い。

「お！気が利くねえ」

俺はガスコンロに火をつけるとさっきの質問をした。

「唯先輩、この部活って何をする部活なんですか？」
「お祭り」

即答！？てかお祭りが活動ってなんだよ！意味わかんねえって！

「いや、そうじゃなくて・・・もっと具体的に」

「だからあ！校内および地域のお祭りの取り締まりと補佐。その他
もろもろ、行事の参加！わかった？」

唯先輩はムスツとしながらパパツと説明した。

それって部活じゃないだろ？わざわざ部活にする意味がわかんねえ
よ！

「結構、やりがいがあるんだから！あ、僕は角砂糖三つね！」
「はあ。」

俺は啞然としながらコーヒーをカップに注いだ。

「よし！食べよ、食べよ！」完全に先輩のペースに乗せられながら俺はパイプ椅子に腰をおろす。

「じゃあ、僕とけんちゃんの出会いを祝して、かんぱーい！」

なんかロマンチックなこと言ってるみたいだけど内容はロマンには
ほど遠いからな。てか、コーヒーで乾杯すんな！どこの国の習慣だ
よ・・・

俺の目の前にケーキが置かれる。見た目は普通に百点だろう。実は俺は甘いものに目がない。早速いただくことにした。

「う、うまい！」

口のなかに広がる甘さのファンファーレ。程よい甘さの生クリームを引き立てる少し酸っぱいくらいの苺。そしてそれらを優しく包むスポンジケーキ！

「唯先輩、うまいです！ホントに！」

「でしょ？でしょ？少しは僕のこと見直した？」

見直したとも！いままでただの変人だと思ってましたから！

「さて、ここで本題。今日はけんちゃんに僕のことを知って貰おうと思って・・・」

突然、先輩は鞆の中から大量の資料を取り出した。
通知票。卒業アルバム。文集。母子手帳まである。

「これ、全部読んで！」

「嫌です」

普通に考えて他人が胎児だったころの状態なんて知りたいとは思わない。てかどこまで知らないきゃなんないんだ？

「ええー？なんで？読んでよお」

先輩はただをこねはじめる。ホントに子供っぽいよなあ。

「んー。けんちゃんの意地悪！お姉さんの言うことが聞けないの？」
あ、拗ねた。

言っておくが俺は姉をもったことなど身に覚えがない。いや、そんなこと言ってるやつがいたかもしれない

「まあ・・・これから先輩のことをゆっくりわかっていくってことじゃダメですかね？」

俺は先輩の気分を損ねないように対応した

「え？／／」

先輩は急に顔を赤くして勝手にテンパっている。いったいどうしちゃったんだか

「それって僕に対する告白？」

「はあ？」

なんかこの人恐ろしく勝手に勘違いしてるよ？そういう意味で言っただんじゃないって！

「僕・・・その・・・」

待て！勝手に答えを出すなよ！なんかその先は今聞いてはいけない気がする！

「これからどうせ部活で会うわけですし、嫌でも先輩のことはわかっていきますよ」

俺は急いで誤解を解こうと説明した。

「へ？あ、なんだ！そういうこと？やだなあ、けんちゃんが急に変なこと言うから僕勘違いしたやつたよ／＼」

先輩は照れ隠し笑いをする。

これまたぐつとくる何かを感じる気がするがまあいいだろう。

なんだ。先輩も可愛いとこあるじゃん。俺は先輩のちよつと女の子らしい一面を見た気がした

「でもね、僕けんちゃんとなら恋しちゃっても・・・いいかなあ」
「え？／＼」

突然の衝撃発言。流れる沈黙。まさか！まさかこの展開は！いいのか？俺は青春しちゃっていいのか？いいんですか？

「せ、先輩！お、俺！」

俺は一思いに言ってしまったおうとした。が、

「つてのは嘘だよ」

俺はぶつとびそうになった。嘘ですか。そうですか。ちよつとでも青春の夢を見ようとした俺がバカだったんだな。

「や、やられた・・・」

「へへへ。だつてけんちゃんは僕の弟だもん！姉弟で恋しちゃダメだよお？」

先輩はしてやったりという顔をしている。まあ、満足したのだろう。
俺はやっぱり先輩にはかなわないな。

コーヒを一啜り。やっぱり角砂糖三つは甘いよな。

episode 3 先輩と転校生

春の日差しが暖かいこの頃。俺は頼杖をしながら早くホームルームが終わらないかと外を眺めていた。

あれから一週間。結局、毎日先輩とあの部屋でおしゃべりをするというだけでろくな部活動なんてできなかった。だいたいそんなに毎日お祭りがあるわけないだろう。

俺は春の陽光に一つため息をついた。

「と、いうわけで今日は短縮日課だからな。えーここでみんなに伝えることがある」

ふとした先生の発言にガヤガヤ騒いでいたクラスが静かになる。俺も意味深な前振りに次の言葉を待った。

「えー、今回我々のクラスに突如転校生が編入されることになった」
クラスが再び騒つく。よくある話だ。俺にとっては大した事件じゃない。俺は再び外へと目をやった。

「はやく・・・弁当食べたいな・・・」

そろそろ桜が咲きだす頃だろうなあ。俺も心機一転イメチェンでもするかなあ。俺はつつんつつん頭をいじった。まあこのままでいいか。

ざわざわざわ……。なんだかさっきよりクラスが騒がしくなった

気がする。まあ気にすることでもないだろう。外は暖かそうだなあ

ざわざわざわざわざわざわ・・・さらに騒がしくなってきた。これはちよつと異常だ。きつとさつき言つてた転校生のことだろう。俺は教壇に目をやろつとしたその時だった。

「建人君！」

凜とした女の子の声が教室に響く。教壇を見てみると確かに先生の隣に女の子がいた。

「お、俺？」

女の子は満面の笑みで頷いた。さらつとした肩まで伸びた髪。それを後ろで二つ縛り。目はくりつと。顔はめちゃくちゃ小さい。そんな美少女は、はっきりと首を縦に振ったのだ。

あれから十分後。

俺の前には転校生。浜崎 彩子って名前らしい。彼女はにこにこしながら俺の顔を見ている。そんなに俺の顔がめずらしいのか？なんだか気味悪いな。

「あの、転校生さん？」

「彩子って呼んでいいよ」

いや、初対面でそんな気やすく呼べないだろ！でもちよつと呼びたいかも

「あ、彩子？」

俺はここは親近感をと思い名前で呼んでみた。

「なに？建人君？」

彼女は天使のほほ笑みで答えてくれた。

さて質問したいことは山とある。それを少しずつ崩していくしかない。

「あのさ、いくつか質問があるんだけど・・・」

「なあに？」

俺は息を大きく吸った。

「なんで今日転校してきたのに俺の名前知ってるの？もしかして昔会ったことあった？それとなんで俺の顔ずつと見てるの？なんか付いてる？変？」

決まった。質問責め！

「だって私と建人君って昔、同じ幼稚園でよく遊んでたじゃん。私も成長したから気付かなかった？それと顔を見てる理由は久しぶりに会ってうれしくなっちゃって！私は建人君に会うために転校してきたんだよ」

決められた・・・。答え返し。

つまり、この子は俺の幼なじみで、わざわざ俺に会いに来てくれたわけね。そういえば県外に引っ越してった女の子いたなあ。俺は昔の思い出に浸った。

そして、我に帰った俺はさっきの彼女の発言に異変を感じる。

今、会いにきたっていった？なんかこの子さらつと嬉し恥ずかしな発言したよね？俺に会いにきたの？マジで？何故に？

「今、わざわざ俺に会いにきたって言った？」

「うん。私、建人君のことずっと好きだったから。」

ほわああああ！今、好きって言った？言ったよね？始まつちやうよ？俺の恋は突然に始まつちやうよ？

「お、俺のこと。す、す、好きなの？」

「うん！建人君だぁーいすき。」

のわああああ！聞いた？ねえ聞いた？今、好きに大がついたよ？大きくなつたよ？

完全に自我崩壊してしまった俺は頭の中がお花畑でいっぱいになった。やばい、昇天しちゃいそう。

「あ、ああ・・・俺にも青春が！甘い青春が！」

「あははは。もう、変な建人君。じゃあ約束の式とかいつにする？」

ん？今、【式】って言わなかった？式ってあれか？数学の答えを導くまでの足跡的なあれか？それとも陰陽寺とか仏教野郎が使つ式神

のことか？

「し、式って？なんのこと？」

恐る恐る俺は質問した

「やだなあ。昔、約束したじゃん！結婚だよ。結婚式のこと！私は建人君と結婚するためにこの町に帰ってきたんだよ？」

幼き頃の可愛い約束。誰だって一度は体験するであろう。それが今、果たされようとしている。俺、そんな約束してたんだ……。てか普通そんな約束を果たしにくるやつなんていないだろ。あなた以外。

目の前で笑う美少女。汗びつちよりの俺。

俺はその日、ずーっと空を眺めながら約束の恐ろしさを考え続けた。

放課後

今日は疲れた。そりゃ自分と婚約をしにきた転校生がくれば疲れるものだろ。しかし何度考えても意味がわからん。まったく結婚なんて話が急すぎだっつーの！でも、こんな可愛い子だったら……

「建人君！一緒に帰ろっ」

可愛い疲労の根源、彩子 came。

「わりい。俺……部活？があるんだよね」

？マークは気にしないでほしい。自分でもよくわからないんだよ。

「え？せっかく建人君と帰れると思ったのに。うゝ」
心底残念そうな表情をする彩子。そんなに帰りたかったの？なんか悪いな。

「じゃあ、私も建人君の部活見学する！」
「へ？」

立ち直り早いな！さっきの残念そうな顔はどこへいった？

「何部なの？野球部？サッカー部？」
彩子の目は部活男に憧れる乙女の瞳になっている。おそらく俺の入っている部活を聞いたら確実に落ち込むな。

「じ、実は……」

部室前。

「……ねえ、建人君？ホントにここなの？」
彩子は未だにお祭り部の存在を受け入れられないらしい。まあ大丈夫だ。俺もつい最近までそうだったから。

「まあ入ればわかるよ。さ、入って入って」
俺はドアを開けた。
と、同時にすごい勢いで何かにくっつかれた。

「ハロー、けんちゃん。今日は遅かったね？」
「ゆ、唯先輩！？／／」

ちよつと何いきなりくつついてんの？ダメだよ！そういうボディタツチ系はアウトですよ！ああ！また自我崩壊するう！！でも、幸せえ！

「もう！遅刻はダメだぞ？僕は一人になっちゃうと死んじゃうんだから！」

それは大変だ。そしてくつつかないでください。

「わかりました。今度からは気を付けますから」

そんなこんなでいつも通りの挨拶をして部室に入る。大方、先輩は何も考えてないんだろな。一息ついてコーヒーでもいれようかなと思った時だった。背中から怒りのオーラを感じる。

「あれ？君だれ？けんちゃんのお友達？」

あ。彩子のこと忘れてた。てへっ♪

「けんとくん？」

ひしひしと伝わる怒りのオーラ。負の念を感じる。

「はい！なんでございましょうか！」

「このひと・・・だれ？」

振り替えると今泣かんばかりと目をうるうるして彩子が立っている

うわー。もしかして俺ってばやっちゃった？純粋な乙女心傷つけちゃった？罪だよな？これって刑法にひっかかるよね？

「けんちゃん。この子だれ？」

この人状況読めてないよ！てか絶対状況が悪化の方向に向かってるよ！

俺は二人にお互いの説明をした。なるべくお互いの怒りに触れぬように。

「ええ！じゃあこの子はけんちゃんの婚約者なの？」

いや、待て。これはそういう幼い頃の可愛い約束であつて。

「そうです！だから建人君にまわりつかないでください！」

認めるな！何勝手に認めてるんだよ！そして何？その独占？確かにまわりついてるけどさ。

「ダメだよ！けんちゃんは僕の弟なんだから！」

「私だつてわざわざ約束を果たすためにきたのに！」

ぶつかり合う視線からは火花が散っている。お互い、一步も譲る気配がない。まさしく犬と猿、ハブとマングース。てか、二人して勝手なこと言ってるけど俺は認めてないからな！

「こうなったら・・・全面戦争だよ！」

うわー！戦始まっちゃうよ！清光の乱？第一次先輩大戦？そのとき歴史が動いた？

「いざ！」

「勝負っ！」

『叩いて、かぶって、じゃんけんぽんっ！』

地味だな！えらく地味だな？俺の価値ってそんなもんなのか？なんかそれはそれで悲しいな。

十分後。

「やった！僕の勝ち♪」

「うわーん！負けちゃったよ」

勝負がついたみたいだ。しかも唯先輩の圧勝らしい。まあなにせよ一件落着か。

「うう・・・建人君、負けちゃったよ」

彩子はマジ泣きしながら俺に言い寄ってくる。

「泣くな泣くな。彩子は頑張ったよ。よしよし」

「ふええええん」

彩子は突然、俺の胸へと勝手に飛び込んできた。だから！俺にくつつくな！

「あー！ずるいずるい！僕も！」

先輩の腕が俺の腕に絡み付く。

ほわああああ！！ダブルブッキング！ダメだ！その感触はレッドゾーンだって！あ、でもこれかなり幸せかも。だんだんお花畑が見えてきた・・・ああ、さよなら

そのあとの記憶がない。あとで先輩に聞いた話だと俺は至福の笑みで気を失ってたそうだ。

episode 4 ヤンキーの恋

桜舞散るこの頃。俺は今日も元気に登校中。

ああ風が気持ちいいな。朝はやっぱりすがすがしいよ。

そんならしくもないことを思いながら、清光並木通りの前を横切る。まもなく学校が見えてくるはずだ。

いつもの朝。しかし事件とは突然起こるものである。ちようどなぜ空は青いのだろうなんて自然の神秘を考えていたときだった。

ドガッ

人にぶつかった。俺としたことが朝からいろいろ考えすぎたな。まったく考え事しながら登校するもんじゃない。

「あ、すみません」

軽く謝罪。英語でいうとこの Excuse me を言っただけだった。しかし俺は目の前の光景に軽い気持ちで吹っ飛んだ。

俺がぶつかった人。それはまさしくヤンキーの風格だ。縦横が軽く俺の1.5倍はある体型。明らかに校則違反であろうスキンヘッド。俺の三倍は太い腕。そして着くずされた制服と耳鼻にピアス。

ヤンキーだよ！朝からヤンキーにぶつかったよ！朝ヤンしちゃたよ！殺されるー！

ヤンキーは俺をガンつけてくる。ぐっと顔を近付けてきた。俺は汗

でパンツまでびしょびしょ。

「んだ？てめえ？」

「あ、あの。すいませんでしたあゝ！！！」

俺は一目散にその場から逃げた。逃げなかつたら確実に殺されてただろう。

命からがら俺は教室へと辿り着いた。まったく朝からとんだ目にあつたもんだ。深々とため息をつきながら席につく。

「建人。おはっ！」

秀がにこにこしながらやってきた。こいつは普通の幸せな朝を迎えられたんだろうな。

「よう・・・」

「あれ？どうした？朝から元気ないな？」

当然だ。こっちは朝から絶体絶命。デッド オア アライブだったのだから。

「実は今日の朝さ・・・」

俺は朝の身の毛もよだつ経緯をすべて話した。思い出しただけでぞつとする。

「ふーん。その人ってたぶん鬼嶋 源一先輩だよ」

鬼嶋？鬼か？やっぱり渡る世間は鬼ばかりだ。名前からしてやばい
だろ！

「般若の源さんっていつて清光の番長だからな」

そうか。俺は番長と接触したのか。ってそれやばくない？めっちゃ
やばくない？

「なんでも、東高の柔道部主将を半殺しにするほど強いらしいぞ？
すごいよなあ・・・って聞いてんのか？」

聞いてません。聞きたくありません。僕はとんでもない御方にぶつ
かったんですね？そうなんですネ？

俺は一日、みんなにバレないように泣いた。

放課後。

俺は鬼嶋先輩に会わないように厳戒態勢で部室へと向かう。見つか
ったら殺される。一瞬の油断が命とりなのだ。

そして、なんとかことなきを得た俺は部室へと無事辿り着いた。
ガチャ。窓から射す夕日が目に染みる。部室の中なら安全だ。俺は

安堵感に包まれた。

ああ、いつもの部室。でもなぜかごつい人影が見える。新入部員かな？物好きもいるもんだなあ。あれ？この人大きいなあ。しかもスキンヘッドじゃん。あれえ？もしかしてこの御方って・・・
ほわああああ！鬼嶋先輩ですよ！あの超恐い番長ですよ！なんで？なんでお祭り部にいるんですか？

「あ！けんちゃん！遅いよ！今日も遅刻だよ？」

唯先輩が俺に気付く。と同時に鬼嶋先輩の目が俺を捉える。

固まる俺。流れる汗。早まる鼓動。逃げたい衝動。残った未練。

「・・・こいつ誰だ？」

鬼嶋先輩の低い声が響く。どうやら超幸いなことに今朝のことを本人は覚えていないようだ。

「この子は、僕の後輩のけんちゃん！お祭り部の部員なんだよ！」

「は、はじめまして。永谷建人っていいいます」

「それで！こちらが僕の友達の源さんこと鬼嶋源一君！」

と、勝手に紹介をはじめめる唯先輩。

ん？ずいぶんと馴々しいんですね。って友達？唯先輩と番長が友達？俺は啞然とした。超ごつい鬼嶋先輩に超小柄な唯先輩はめちゃうちゃ不釣り合いだ。

「おい、永谷！お前唯さんに何か迷惑かけてないだろうな？」

鬼嶋先輩が俺のことを睨みつける。何？なんで俺のこと睨むんすか？てか、唯さんって、番長でもあろう御方が言う台詞じゃないだろ。

「大丈夫だよ！けんちゃん優しいんだから！この前も僕の甘えにちゃんと答えてくれたもん♪」

してない！俺は断じてしてない！・・・たぶん

まったく唯先輩ってホント人のことからかつの好きだよな・・・。

とその時だった。俺は横側から黒い何かを感じた。憤怒のオーラが伝わってくる。見てみると鬼嶋先輩がその大根より太い腕をわなわな震わせているではないか！そしてそれは確実に俺へと向けられている。

「あ、あの。鬼嶋先輩？」

「永谷、貴様唯さんと何をしたああああ！！」

うわぁ。ぶつつんきてるよ！なんかよくわかんないけどぶつつんしちゃってるって！てかなんもしてねえよ！

「え、あの・・・その」

「貴様・・・許さん・・・その首根っ子へし折ってくれる！」

殺される！植物人間にされる！よくわかんないけど俺ってば鬼嶋先輩の怒りに触れちゃったみたいだ！

「鬼嶋先輩、落ち着いてください！俺は唯先輩に何も・・・」

鬼嶋先輩は聞く様子もなく俺目がけてその腕をふりあげた。「喧嘩はダメだよ！」

と、絶体絶命の俺を救ってくれたのは唯先輩だった。感謝感激雨あられ。

「で、でも唯さん・・・」

「ダメだよ源さん。けんちゃんに暴力ふるっちゃあ」

「すいません」

うわ！めっちゃ素直！

急におとなしくなった鬼嶋先輩。よくわかんないが唯先輩には逆らわないらしい。

「わかればよーし！源さんは僕の正義のヒーローだもん！暴力なんて奮わないよね？」

「は、はい！」

うれしそうだな・・・。

「僕が困ったときは源さんがいるもんね？」

「はいっ」

うわ！マークついちゃったよ。キャラに合わなすぎだろ？

「よしよし」あ、僕教室に忘れ物しちゃったみたい。ちょっととっ

てくるね」

突然忘れ物を思い出した唯先輩はたたたと部室から走り去った。
ちよつと！鬼嶋先輩と二人きりは危険だって！

「……」

「……」

「おい！永谷！」

「はいっ！」

「お前、ホントに唯さんとなんでもないんだな？」

この人もしつこいなあ。

「はい、唯先輩はただの部活の先輩ですって」

「そ、そうか。なんども聞いて悪かったな」

あ、あれ？なんか変だなあ。

鬼嶋先輩はそわそわと窓の外を見たりして落ち着きがない。ん？この挙動不振はまさか……

「あの、先輩？」

「あ？」

俺は勇気を振り絞って聞いてみた。

「先輩はもしかして唯先輩のことが……好きなんですか？」

「う……」

鬼嶋先輩の顔が赤くなる。それはそれはスキンヘッドの部分まで赤くなる。夕日よりも赤くなっていた。

「・・・ああ、そうだよ。なんか文句あつかよ」

認めたよ。鬼嶋先輩は居心地が悪そうな顔で答えた。不良だって恋するさ。

「いいか、このことは黙っとけ。番長である俺が恋してるなんてことがバレたら面目丸潰れだ」

「わかりました」

しかしなぜに唯先輩なんだ？ほかにいくらでもいい女はいるだろうに。まあ確かに可愛いけど・・・

ん？いかんいかん！こんなこと考えてちゃいかんよ！変な気が俺にまで起こったら大変だからな。

「・・・唯さん。可愛いよなあ」

うわ！ベタ惚れだよこの人。ホントに好きみたいだな。

「そ、そうですね。知ってます？意外にケーキとか作るのうまいんですよ」

「ケーキ？」

俺は何気ないただの話をしたつもりだったのだが。

「・・・貴様、唯さんの手作りケーキを食ったのかああああ！！」

ええー！ダメなの？

「許せん！貴様、なんともないってのは嘘だったんだな？ああ？」

ケーキ食べただけじゃなか！

俺の心の叫びを知るわけもなく鬼嶋先輩は俺のむなぐらを掴む。ダメだ、殺される！

ガチャ。突然、ドアが開いた。

「あー！暴力ふるっちゃダメだって言っただでしょ？」

唯先輩が帰ってきた。再び絶体絶命の俺は唯先輩に救われた。

「ゆ、唯さん。これはそのコイツが」

「いいわけ無用！ひどいよ源さん！」

ぐさっ！そんな擬音が俺には聞こえた気がする。

「コイツが、唯さんの手作りケーキをおいしいって言うから！」

あーあ言っちゃったよ。自爆で誤爆だなこりゃ。

「え？けんちゃんが僕のケーキを？」

はんべそをかきながら頷く鬼嶋先輩。ホントに番長なのか？

「そっかそっか！」

唯先輩は嬉しそうに頷いている。屈託のない笑顔は子供らしい。まあこういう無邪気なところに男は弱いものだ。

「よし！じゃあ僕が今からケーキ作ってあげる！源さんも食べてってね」

「お、俺も食べてっていいんですか？感激！」

ルンルンしながらケーキの準備をはじめる唯先輩。今にも小踊りをしだしそうなくらい喜んでいる鬼嶋先輩。

番長の威厳はどこへ？窓際で黄昏、ため息をひとつつく俺。

俺はその晩、なぜか鬼嶋先輩が唯先輩に泣きすぎる夢を見た。

episode 5 セレブ先輩とお花見

土曜日。週休二日制になってから俺の土曜日は憩いの日となった。

起床時間はかならず11時以降。これが俺の中のルールだ。

そして今日もまたこのルールに従って寝過ごすはずだったか。

俺の安眠を妨げるかのごとく鳴り響く着信。まあどうでもいいことだろう。俺は布団へと潜り込み直す。

[illegible][illegible]

「うるせえええ！てかーって何の音だあああ！」

俺は電話に猛烈に突っ込みながら画面を見た。

【着信中 中川 唯】

この人ですか。

ピッ

「もしもし・・・」

「ハロー♪けんちゃん!」

テンション高っ!

「おはようございます・・・」

「ん?元気がないぞ!お姉さんの声聞いたんだからもつとシャツキ
つとしなさい!」

元気がないのはあなたが朝から電話をするからですよ。俺はやれや
れと思いながら時計を見る。まだ9時にもなっていない。

「で、こんな朝早くから何の用ですか?」

「部活だよ!ぶ・か・つ♪」

電話越しでもわかるくらい唯先輩は上機嫌だ。

「部活?・・・ですか?なんか行事なんてありましたっけ?」

「おおありだよ!じゃあ校門で待ってるから早く来てね?遅れたら
お仕置きだぞ?」「はあ・・・」

一方的に用件を告げる。唯先輩。あいかわらずマイペースだな。

「じゃねー!」

ブチッ・・・ツーツー

こうして俺は大切な土曜日を部活で潰すことになった。

春の陽気に包まれながら学校へと向かう。なんだか休みの日に学校にいくのは損した気分になるな。

校門の前には既に唯先輩が来ている。

「おはようございます。唯先輩」

「お！来た来た。意外と来るの早かったね？」

「お仕置きは勘弁ですからね。で、今日はなにをするつもりですか？」

「ずばり、今日は！」

「唯ちゃん」

突然、唯先輩を呼ぶ声。と、同時に黒いベンツが目の前で止まる。声の主はこのベンツの中のような。

「あ！来た来た！」

ガチャ。ベンツの中から黒いスーツを着た男がでてくる。男は素早く後部座席にまわりドアをあけた。

ガチャ。でてきたのは一人の女の子。容姿端麗とはこのことだ。ベンツから出てきたのは超美人。さらさらのロングヘアー。透き通る白い肌。その風格はまさしくセレブってやつだった。

「やつほー」恭子！

「おはようございます。唯ちゃん」

超美人は丁重にお辞儀をした。

「唯先輩とは大違いだなこりゃ」

「む！なんか言った？」

「いえ、なんにも」

俺は適当にごまかしといた。

「こちらが建人さんですか？」

超美人は俺のほうを見た。

「そうだよ、けんちゃん、この子は僕の友達の真壁 恭子！」

「初めまして。真壁 恭子と言います。建人さんのことは唯ちゃんから聞いていますよ。何卒よろしくおねがいますね」

恭子先輩はニコツと笑った。

やつべ！天使だよ！翼をなくした天使だよ！天使のほほ笑み見ちゃった！これって神の導き？

「じゃあそういうことで早速行きましょうか？」

「行こっ！行こっ！」

というわけで俺ら三人はベンツへと乗った。車の中はメチャクチャ広くてそこで生活ができそうなくらいだった。

「ひ、広い・・・」

「ふふーん♪驚いたかけんちゃん！何を隠そう恭子は真壁財閥の一

人娘なのだよっ！」

よくわかんないが唯先輩は得意満面だ。

真壁財閥。俺らが住む光陽町のほとんどの土地を所有している超大富豪だ。なんでも古くはここらを取り締まってた大名の末裔とか。ともかく俺ら一般人とは住む世界が違うわけだ。

「もう、唯ちゃん。そのことはあんまり言わないでって言うてるでしょ？」

「ゴメンゴメン。ついね」

「建人さん。そんなことは気にしないで仲良くしてくださいね？」
「はいっ！」

お金持ちなのに性格が悪くないなんて！なんていい人なんだ！

「あー！けんちゃんなんでそんないい返事するの？僕に対する返事はいっつも安っぽいのに！」

「そ、そんなことないですよ？」

「ホント？」

「そんなことより今日の目的を教えてくださいよ！」

俺は話を逸らした。唯先輩はこういう話をいつまでも根にもつからだ。

「それは私から説明しますね。今日はお祭り部であるお二人に真壁財閥の管理区である『光陽自然運動公園』の巡回をお願いしたいのです」

話のスケールでかいなおい！

「巡回・・・ですか？」

「はい、本来なら家の雇い人を使うのですが仕事の交渉で遠方へ出向いている父のお供で人が足りないのです」

さすが財閥。理由のスケールもでかい。

「いいですけど、なんで巡回なんて必要なんですか？」

「お花見シーズンですから」

なるほど！あの公園はこの時期、花見の客で混雑するからな。

「そこで、僕らが花見というお祭りの巡回をするってわけ！」

それで、部活ってわけね。確かにあの賑わいはまさしくお祭り騒ぎだもんな。

キーンッ！車が止まった。どうやら陽光自然運動公園に着いたようだ。

執事みたいな人がドアを開けてくれる。この人も大変だな。俺は軽く会釈して外に出た。

「うわぁ！綺麗！」

唯先輩は目の前に咲き誇った桜に大喜びだ。こういう子供っぽいところがあるんだよなあ。唯先輩は勝手に先へ行っちゃっている。

「けんちゃん！早く早く！」

「今、行きますよ」

「では、早速巡回を始めましょうか」

こうして俺ら三人は公園内の巡回を始めた。ちよつと行くと桜がさつきよりも綺麗に咲いていてその下は見物客で大にぎわいだった。

「ねえ？恭子！具体的に僕たちは何すればいいのかな？」

「基本的にはゴミの持ち帰りの呼び掛けと迷惑行為の防止です」

「へえ〜地味だね」

コラコラ。立派な仕事なんだからそういうこと言っちゃダメだろ！

「そんなこと言わずに頑張りましたよね？」

おお！恭子先輩、大人〜。

「僕もお祭りに参加したかったなあ」

はあ。唯先輩、ガキ・・・。

こうやって二人を並べて見てみるとかなり相反した性格だな。唯先輩は可愛い系だけど恭子先輩は綺麗系だしな・・・。

「それでは、行きましょうか？」

こうして巡回を始めた俺ら。たくさんいる見物客のグループに声をかけるといふ確かに地味な仕事だ。まあそれでもやらないよりやったほうがマシだしな。柄にも合わないけど、いいか。

「ゴミの持ち帰りお願いしまゝす」

「分別してくださいね」

まあこの二人からのお願いなら大抵の人間は素直に従ってくれるだろう。

俺はとりあえず周りに何か異変はないか見渡していた。

しかしすごい人だな。結局は酔っ払って桜なんて関係なくなっちゃうもんなのに。

まあお祭りがみんな好きなだけか。俺も人がたくさんいるところは好きだし・・・ん？

周りを見渡していた俺の視界にうずくまる女の子が入った。とりあえず近づいてみる。

「・・・ぐすっ・・・うう」

迷子だ。こんだけ人が混雑してれば迷子がいてもおかしくない。

「君、大丈夫？」

「うえつく・・・うう」

ダメだ。俺にはこういう小さい子の扱いになれてないからな。困ったなあ

「大丈夫ですか？どこから来たのかなあ？」

「恭子先輩！」

恭子先輩が少女に話し掛ける。目線とかをちゃんと合わせてるあた

りからきつと扱いには慣れているのだろうか。俺は見守ることにした。

「迷子になっちゃったみたいです。悪いのですが公園の事務室に行つて迷子の放送をしていただきたいのですが」

「僕、行ってくる！」

唯先輩が事務室へと向かった。恭子先輩は少女が不安にならないように一緒に話をしている。結局、俺はその場に立っているだけだった。

「恭子先輩、子供が好きなんですね」

「ええ。なんだか子供つて可愛いじゃないですか」

ホントにこの人はいい人だな。見てるこっちが癒されるよ。俺もこうしてはられないな。なんかしなきゃ！

俺も『癒しの恭子先輩』と少女の相手をした。

「お姉ちゃん、このおじさん誰？」

「お、おじさん？」

コイツさらつとひどいこと言つな。てか俺つておじさんに見えるほど老けてんのか？

「ふふふ。おじさんではなくお兄さんですよ」

「・・・？鬼じいさん？」

うわ！恐いだろ！おじさんから角とか生えてるのか？悪い子はいね

えがーって感じか？

「鬼おじさん♪鬼おじさん♪」「どうやら建人さんのことを気に入ったようですね」

鬼おじさんか。まあ子供が言つとなんか愛敬があつて許しちゃうんだよな。

ピンポンパンパンポン

突然、園内放送が聞こえる。

『あー。あー。けんちゃん！恭子！迷子の親見つかったから事務室まで来てっ』

ピンポンパンパンポン

あちゃー。なんでアナウンスしてんのが唯先輩なんだよ！周りの人めっちゃ不思議がつてんだろ！てか、もうちょつと言い方つてもんがあるだろ？

俺は周りの目を気にしながら少女をおんぶして事務室へと向かった。

「おーい！けんちゃん」

事務室の前で唯先輩が腕がちぎれんばかりに手を振っている。

「唯先輩！この子の親が見つかったんですか？」

「うん」

「春子！」

唯先輩の後ろから若い男女が現われる。

「パパ！ママ！」

少女は俺の背中から降りると両親のもとへと走った。運命の再開というやつか。

よかったなあ、鬼おじさんは嬉しいよ。

「やりましたね。建人さん」

恭子先輩が天使のほほ笑みで俺の顔を覗きこむ。

「はい！」

俺も満面の笑みで答えた。

別れ際、少女の両親は俺らに深々とお辞儀をしていった。少女も

「ばいばい、お姉ちゃん。鬼おじさん」

なんて言って手を振っていた。

夕方。

「お二人とも今日はありがとうございました」

「いえ。たいしたことはしてませんから」

「僕たちでよかったですらいつでも呼んでね！」

無事、巡回を終えた俺たち。もうすっかり夕暮れどきで見物客もぞろぞろと帰りの準備をしている。

「それでは私はこれで。また学校でお会いしましょう」

恭子先輩は黒塗りのベンツに乗って帰っていった。セレブだな。

「ねえ、けんちゃん？」

「なんですか？」

「鬼おじさん……ってなに？」

「……」

その後、俺は一週間くらい唯先輩に鬼おじさんと呼ばれるはめになった。

episode 6 お宝とお弁当

ぐううううう。

俺の腹の虫が鳴いている。

キンコーンカーンコーン

「授業はここまで！」

教師が教室から出ていく。現在12時30分。お昼どきだ。俺は午前中の授業の疲れと空腹で机に突っ伏した。

「建人、飯食おうぜー！」

「建人君。ご飯たべようっ」

秀と彩子が俺のところにやってくる。気が付くと俺らは三人で昼飯を食べるようになっていた。

「ああ、そうだな」

重い体を起き上がらせる。昼飯でも食べて精力付けないとな。

と、俺が昼飯を食べようとしたときだった

ガラガラガラ！

メチャクチャすごい勢いで開くドア。騒ぎだすクラスメイト。お構いなしに昼飯にがつつく俺。

バンッ！俺の机が叩かれた。驚いて見上げると

「ハロー」けんちゃんっ！」

「お久しぶりです。建人さん」

「唯先輩？恭子先輩まで？」

そこにいたのは唯先輩と恭子先輩。クラスメイトは突然現われた美少女に騒然としている。

「ど、どうしたんですか？クラスにまで来ちゃって」

「いやあ、来たるゴールデンウィークの部活予定に関して話しておきたくって」

そっか。俺が入学してからもう一カ月弱。間もなくゴールデンウィークってわけだ。

「そうですね・・・で、ゴールデンウィーク中は何かあるっていうんですか？」

「実はだね。こんな企画があるんだよっ」

先輩は俺の机に一枚のチラシを叩きつけた。

『ゴールデンウィーク企画！町内宝探し大会！』

下には光陽町内会と書いてある。まあよくある町主催のイベントってわけだ。

「宝探しだよっ！宝探し！」

唯先輩の目はめちゃくちゃ輝いている。こづいつの好きそうだな・・・。

「で、これに参加するんですか？」

「当然！お宝が僕らを待ってるよ！」

ダメだこりゃ。行かないなんていったら駄々こねそうだな。どうせゴールドenウィークなんて暇してるだろうし。

「いいですよ。どうせ暇ですし」

「わーい♪やったあ♪」

唯先輩はびよんぴよん跳ねている。ホントにこの人は俺の年上なんだか。

「へえ」

「おもしろそうだな、これ？」

一部始終を聞いていた秀がチラシを片手に呟く。彩子も興味深々だ

「ん？君は？」

びよんぴよん跳ねていた先輩が秀に気付く。今思つと秀と先輩が会うのはこれが初めてか。

「ども、大橋 秀つす！」

「初めまして！僕、中川 唯！いつもけんちゃんがお世話になります」

おいおい！あなたは俺の保護者か？てかどつちかと言つと逆じゃないか！

「いえ、お気になさらず」

おい！お前ものつてんじゃねえよ！

「それでは皆様で参加になったらいいのではないのでしょうか？」

「おお！恭子、ナイス提案！」

みんなで参加か。確かにそっちのほうがおもしろそうだな。

「よし、じゃあ決定！」

こうして俺たちは先輩が持ち込んできたこの企画に参加することになった。

そして、当日。

俺らは大会の主催地である沙矢田山のふもとにある広場へと集まっていた。なんでも参加するのは学生が対象らしくみんな気合いが入っている。

「すごい、人ですね」「てか、みんな気合い入ってんな」

彩子と秀が驚きの声をあげる。ちなみに恭子先輩はこの大会の役員

らしく残念ながら参加はできない。ホントに残念。

「けんちゃん、お弁当たくさん作ってきたからたくさん食べてね」

唯先輩は手提げカバンの中身を俺に見せ付ける。

これを鬼嶋先輩に見られたら終わるな。てか、そんな昼飯必要なほど持久戦なのか？

「みなさん、今日はお宝探し大会に参加していただきありがとうございます」

壇上に恭子先輩が現われた。あいかわらず癒しのオーラを放っている。

「今回、お宝が隠されているのはこの沙矢田山自然公園内です。園内には湖、滝、洞窟と自然がたくさんあります。がんばって探してください」

ここ、沙矢田山自然公園はほぼ自然を残した公園で広さは東京ドームより広いらしい。そんな中からお宝を探すのか。大変だなこりゃ。

「それでは皆さんがんばってくださいね」

恭子先輩の天使のほほ笑みに男子陣は大喜びだ。俺も喜びたかったが唯先輩がうるさいのでやめといた。

「それではよいスタート！」

恭子先輩の掛け声と共にみんな広場から出ていく。秀と彩子も走って行ってしまった。

「よし！僕らも行くよっ！」

俺と唯先輩もその場を後にした。勢いよく出発したのはいいのだがこの公園はめちゃくちゃ広い。さっそく現在地がわからなくなってしまった。

「けんちゃん、ここ、どこ？」

「さあ？俺にもわかりませんよ」

「とりあえずあの丘の上で休もうつか？」

「そうですね」

早くも休憩。こんなんでお宝なんて見つかるのか？

とりあえず丘の上まで登る。そこにはタンポポがたくさん咲き誇っていてとても綺麗だった。ちょうど休むのにいいベンチが置いてある。

「休憩、休憩とっ」

唯先輩は一目散にベンチに座る。

「けんちゃん、はやくう！」

唯先輩は自分の隣をバシバシ叩いている。指定通り隣に座る俺。

「うーん・・・風が気持ちいいね？」

「そうですね。春風が気持ちいいですね」

しばらく風にあたっている先輩。目なんて閉じちゃってそのまま寝なきやいいけど。

「あ！お弁当食べよっか？」

先輩はいそいそと手提げカバンからお弁当を取り出す。そして一つのおかずを指さしながら上手にできたんだあとニコニコ笑う。

可愛いなあ・・・っていかん！変な気を起こしては！俺は普通の人と恋がしたいんだ！

「どうしたの、けんちゃん？」

「い、いえ。なんでもないです」

「んー？」

唯先輩は顔をぐつと近付けてくる。近いっ！近いって！でも近くで見るとホントに可愛いなあ・・・いかん！

「な、なんですか？」

「べつになんでもないよ。そんなことより食べよ食べよ」

「そうですね。せっかくなんでいただきますね」

どれもこれも美味そうだ。俺はさっそく箸をのばしたが・・・

「僕が食べさせてあげる！」

「ホントに？やったね」

先輩はにこにこしながら次のおかずを取る。こうして俺は先輩に昼飯を食べさせてもらった。めちゃくちゃはすかつたけどま、うまいからいいか。

「ね？今度はけんちゃんに僕に食べさせてよ？」

「お、俺がですかあ？」

「うん」僕、けんちゃんにあ〜んってされたいなあ」

散々食べさせてもらったしやらないわけにはいかないよなあ。

俺はおかずを一つ摘んで先輩の口の前へと運ぶ。

「あ、あーん・・・」

「あ〜ん」

顔を真っ赤にしながら唯先輩は食べた。まったく自分が恥ずかしいならしなけりゃいいのに。

ぱくつ。もぐもぐ、ごっくん

「おいしい」けんちゃんありがとっ」

突然、俺の首に手を絡めて抱きついてきた先輩。一瞬、甘いい匂いがした・・・って！ほわああああ！ダメだあ！これは反則技だよお！ああ先輩からいい匂いがするう〜。俺って変態？俺って変態なのか？

「せせせせ先輩っ!？」

「けんちゃん♪」

ダメだ!この人俺から離れる気ないよ!でもこれはこれで幸せかも・
・っていかん!自我を保たなければ!ああ、頑張れ!俺!

「どう?ドキドキする?」

してますとも!ドキドキのバックンバックンですよ!心臓が爆破し
ますぜ?

「せ、先輩・・・」

「けんちゃん、嬉しい?」

ダメだ。俺の反応見て楽しんでるよ。誰かこの人止めてくれ!

ピンポンパンポン

突然の園内放送に先輩が俺から離れる。助かった。

『お宝探し大会に参加の方に連絡です。お宝が見つかってしまいま
したので大会はこれにて終了です。お気を付けてお帰りください』

見つかるの早ッ!

「えゝ?僕たちがここでお昼食べてる間に終わっちゃったの?」

「そうみたいですな・・・」

こうして、お宝探し大会は終わってしまった。まったく何しに来たんだか。それでも先輩はあーんできたのがよっぽど嬉しかったのか満足していたみたいだった。

先輩って俺のことが・・・んなわけないか。

後日、俺らはお宝を手に入れたのは彩子と秀ということを知った。

episode 6 お宝とお弁当（後書き）

今回はギャグが少ないです（汗）一応、ラブコメ要素も入れようかと思ひまして（苦笑）今後の二人はどうなるのか？それは後のお話で♪

episode 7 危険な博士先輩

ザーッ・・・

外は雨が降っている。まったく雨つてのは気分が落ちるよな。

今日も授業を適当に聞き流して一日を過ごした。そして放課後。俺は部室へと向かう。いったい今日は唯先輩が何をしてくれるか。

日常と化してしまった部活。俺は部室のドアを開けた。

ガガガガッ！ギユウイイイイン！

うわ！いきなり非日常な音が聞こえてるよ！

部屋の中には先輩と誰だか知らない人がテレビの前にいる。どうやらさっきの音はこの人が持っている謎の機械からのようだ。

「あ！けんちゃん！やつぽー」

唯先輩が俺に気付く。

「な、何やってるんですか？」

「今日はね・・・」

「中川氏、終わりましたよ」

さっきまでテレビをいじっていた男が顔を上げる。

「ありがと、博士っ」

博士？博士って御茶ノ水か？まさかア。ム作ってくれるのか？

「こちらが噂の永谷氏ですか？」

博士？は俺を見ながら眼鏡を上げた。短くまとめた髪型は前も襟足も真つすぐだ。眼鏡はぞくに言うおしゃれ眼鏡をしている。背丈は俺と同じくらいか、なぜか白衣を着ている。

「そうだよ」

「はじめまして、僕の名前は葉加瀬 純一です。以後よろしく」

うわ！葉加瀬ってまんまじゃん！見た目まんまだよ！もしかしてあれか？バイオリンの天才の血族か？

「ど、どうも。永谷 建人です」「永谷氏の噂はよく中川氏から聞きます」

「もう！博士、恥ずかしいよー！」

唯先輩は一人で赤くなっている。てかなんでこのひと名前の最後に【氏】って付けるんだよ？また変わった先輩の登場ってわけだな。

「それで博士先輩は何やってたんですか？」

「地デジだよ？けんちゃん！」

「地デジ？」「僕が説明しましょう。地デジとは地上派デジタルの略称であって来たる2011年にアナログ放送がすべて終了しこの地デジが全国で展開されるわけです。地デジになることによって映像や音声の不具合がなくなり・・・」

ようは部室のテレビを地デジ対応にしてたんですね。ってそれすげえな。さすが博士。

「ホントありがとねっ」

「中川氏のお願いでは断れませんから。中川氏はネット上で非常に人気でありますからな」「やだなあ。なんか恥ずかしいよ」

恥ずかしいってかやばいだろ！ネットで噂になってるってかなり危険な気がする！

「僕、コーヒー入れるね」

唯先輩は席を立ってガスコンロへと向かう。

「さて、永谷氏。少し失礼します」

そついうと、博士先輩はカバンの中から変なスコープのようなものを取り出して俺へと向けた。

「スキャン、開始」

ピッピッピッと怪しげな電子音が聞こえる。なんかこれ、やばくないか？

「永谷 建人。16歳。誕生日4月7日。身長174cm。体重59kg。血液型O型。好きな食物、プリン・・・」

「ってちよつと！博士先輩？何勝手に人のプロフィール読み上げるんすか？」

「これは失礼。初対面の人にはこれをしないとダメなんですよ」

初対面の人間にこんなことやってたら確実に嫌われるだろ！

「まあ、今取得できるデータはこんなもんでしょう」

「データ？」

「はい。この スーパープロフィールスキャナー で得たデータです」

うわー！やべえよ！この人頭のほうがかなりやべえよ！

「このスキャナーに捉えた人物の容姿などを情報化しそれをありとあらゆるデータベースと照らし合わせ一致したものからその人物のデータを作り出し・・・」

ようは人のことがなんでもわかっちゃう機械ってわけか。ってそれすげーな！

「そ、それ凄いですね？」 「無論。僕の発明品はすべて凄いですから」

「発明品？」

「はい、発明品です」

HAHAHA！コノヒトオモシロイネ！あんまり調子こいてつとぶつとばしますよ？こんなもん作れるわけないだろが！

「部品はすべて秋葉原とネットで購入したんですよ？いやあこの情報置換のアプリケーションを作るのには苦労しましたよ」

・・・マジ？

「ホ、ホントなんですか？」
「ホントです」

やべーよ！この人マジで博士だよ！作っちゃってるよ！法律完全無視の変な機械を作っちゃってるよ！

「どうやら、あなたはまだ僕の発明品が信じられないみたいですけどね？」

「まあ、普通信じられないですけど」

「では、もう一度このスーパープロフィールスキャナーの凄さをお見せしましょう」

博士先輩は再び謎のスコープを持ち出してきた。そして

「博士！砂糖何個？」

「僕はブラックで」

「わかった」

唯先輩へと向けた。再び怪しげな電子音が鳴り響く。

「中川 唯。16歳。誕生日10月16日。身長153cm。体重45kg。スリーサイズB86W56H83。キスは子供のころ一回きり。初た・・・」

「もういいですっ！」

俺はスコープの電源を切った。これ以上調べたらなんか知っちゃいけない情報がでてくる気がする。

「うーん。前回よりバストが2cmも成長している」

変態だー！この人変態だよ！何冷静に分析してんだよ！

「やはり発展途上でしたか。まだまだ成長の見込みがありそうですね」

博士先輩は満足そうに笑った。頼むから犯罪は起こさないでくれよ。

「コーヒー、お待ちっ」

発展途上・・・いや、唯先輩がコーヒーを持ってくる。自然と目が胸へいつてしまう。

「・・・発展途上か」

「ん？けんちゃんなんか言った？」

「い、いえなんにも」

俺はコーヒーを飲んでごまかした。

「博士ってすごいんだよけんちゃん知ってる？」

嫌ってほど知ってるって

「中川氏にお褒め頂き光栄です」

「もう！大げさなんだから！」

唯先輩はバシバシ博士先輩を叩いている。バカっぷり丸出したなこりゃ。

「あ、そういえばこの前言ってたロボット。できたの？」

「ああ。女子高生型ロボット　ギャルえもん　のことですか？」

誰かー！この人捕まえて！日本の警察総動員で捕まえて！

「あはは。それぞれ」

あははって笑えないだろ！

「あとは人格のプログラミングだけです」

完成間近じゃねえかよ！

「楽しみだなあ
」

付き合ってらんねえ

「ときに永谷氏」

「お、俺ですか？」

「永谷氏は中川氏と大変仲がよいようで？」

「そうだよっ」僕とけんちゃんは仲良しこよしだもんね」

唯先輩はニコニコしながら俺の頭をくしゃくしゃ撫でる。やめろ。

「ふむ。それでは少し注意なされたほうがいい」
「注意？」

博士先輩は俺の耳元で囁いた。

「中川FCに目を付けられますよ」
「中川FC？」

なんだそれ？サッカーチームかなんかか？

「中川唯のファンクラブですよ」
「ファンクラブ！？」

ありえねえ！あっちゃいけねえよそんなクラブ！みんな上っ面に騙されちゃいかんよ！

「そのファンクラブがあなたのことを血眼で探しています」
「血眼って・・・」

「ちなみにファンクラブがあるのは獄怨高校ですよ」
「獄怨高校！？ってあの超不良校ですかっ？」

待て待て待てい！そんな危険な連中に目付けられたのかよっ！マジでぶっ殺されるから！

「ご武運を祈ります」

「ね？ね？なんの話してんのっ？僕にも教えてよ！」

唯先輩が俺と博士先輩の間に首を突っ込んでくる。
あなたのせいで俺は！俺はああ！

「中川氏。男同士の野暮な話ですよ」

「・・・？」

「それでは僕はこのへんで帰ります。ギャルえもんのプログラミングがありますので」

てめえは早く帰れ。

「完成したら見せてね」

「はい。それでは永谷氏、また会いましょう」

博士先輩は不気味な笑みを浮かべながら部室から出ていった。また変な先輩と知り合ったちゃったな・・・。

「男同士の野暮な話ってなあに？」

俺を激しく揺さ振る先輩。この人が一番意味わかんねえな

「その時、けんちゃんはまだこれから自分に降り掛かる悲劇を知るよしもなかったのだった・・・」

「せ、先輩っ？」

episode 8 ヤンキーと喧嘩それからパンツ！

俺は今、部室でコーヒーを啜っている。

目の前には唯先輩と鬼嶋先輩と手作りケーキ。こつやってときどき鬼嶋先輩は部室に来る。ここはヤンキーの溜り場じゃないぞっ

「それでね！ミミガーは豚の顔だなんて言いだしてね！あはは。ハリネズミじゃないよ」

よく意味わかんないが二人はそれなりに盛り上がってるようだ。

・・・俺、複雑な気持ち・・・なわけないよな。

ふふふふ

ふと、ケータイが鳴り響く。どうやら鬼嶋先輩のようだ。

ピッ

「げ、源さん！助けてください！亮が！」

「うるせえ！俺は今、唯さんとお茶してんだ！邪魔するとぶっ殺すぞ、ゴラ！」

うわー。私情優先かよ！この人やつぱ鬼だよ。

「獄怨高のやつらが喧嘩売ってきて大変なんすっよ！お願いします！番長！」

「獄怨・・・？ちっ！仕方ねえな。3秒で殺してやつから待ってる」
ブチッ！ツーッー

「すみません、唯さん。ちょっと用事が入っちまったみたいで」
「用事？」

「まあちよつとした祭り喧嘩みたいなもんで・・・」

その発言をした瞬間、唯先輩はいつもに増して目をキラキラと輝かせた。

「お祭り・・・」

唯先輩の禁句シリーズ第一弾 『お祭り』

「源さん！僕らもそのお祭り行くっ！」

「僕らって俺もですか！」

「もちろんっ！」

この人も一種の鬼だな。

「ですけど、唯さん。この祭事は少々危険で・・・」

たぶん、少々では済まないだろうな。なんせ相手はあの獄怨高校だし。

「お祭りに危険は付き物！それにお祭りと聞いてお祭り部が活動し

なくてどうすんのっ！」

よくわかんないが説得力があんな。

「しかし、唯さんを危険な目にあわせるわけには・・・」

「大丈夫！僕には最終兵器『けんちゃん』がいるから！」

「って、俺ですか！」

「最終兵器・・・永谷、お前そんなに強いのか！？」

「いえ、俺は・・・」

「当然だよ！僕の舎弟だよ？」

おい待て！何勝手に人のこと弟から舎弟に変えてるんだよ！てか弟すら俺は認めてないからなー！

「それなら安心だ」

安心じゃねー！バカだろ？番長！

「よし！出発っ！」

そして、俺ら三人は現場である商店街へと向かった。なんで俺まで一緒なんだか・・・。

光陽商店街。

「おーい！お前らどうしちゃったんだ！」
「げ、源さ・・・ん」

何人ものヤンキーが虫の息で倒れている。おそらく獄怨高校の連中にやられたのだろう。すでに連中は消えていた。

「すみません・・・源さん」

「くそっ！獄怨の奴らめ！許せん！」

鬼嶋先輩は自分の舎弟がやられたことに憤慨している。

「おい！お前ら！そんなところで寝てんじゃねえ！」

「源さん・・・！」

「今から獄怨の連中を絞めにいくぞ！立てゴラ！」

「・・・源さん！お供します！」

続々と倒れていたヤンキーが起き上がる。タフだな。

「いくぞ！お前らあ！」

『おおおおお！！』

「おおお、ほら、行くよ、けんちゃん！」

「はいはいって俺も！？」

絶対この人だけ完璧場違いだろ？てか状況読めてんのか？

獄怨高校、放課後の校庭。

両校対向にびしつと並んで睨みあっている。唯先輩は朝礼台の上で今か今かとお祭り〓喧嘩を待ちわびているようだ。

そして俺は鬼嶋先輩の隣にいる。隣？隣ってポジションはおかしくないか？なんで俺ここにいんの？

状況が読めていない俺を獄怨高校の連中は睨み付ける。怖えよ。

「これはこれはわざわざ清光の皆様がおいでになるとはねえ」

獄怨のヘッドがでてきた。鬼嶋先輩並みに怖い。

「よう、須藤。コイツらが世話になったみたいだからな。挨拶にきたんだ」

「そうか・・・まあ何度やっても同じだと思っけどな！なあお前ら？」

ケラケラと笑う獄怨の連中。感じ悪いな。そして怖えな

「どうだかな？こっちには最終兵器がいるからな？」

「最終兵器だと？」

「コイツだ」

鬼嶋先輩は俺の背中を押す。

俺か？やっぱり俺なのか？俺は最終兵器なのか？

言い出しっぺの唯先輩は足をバタバタさせて始まりを待ちわびている。あとで絶対ぶつとばす。

「・・・」

「・・・」

ぶつかり合う視線。流れる沈黙。舞い上がる砂埃。雰囲気あるな。

「・・・」

「・・・」

「はじめえ！」

「え？唯先輩？」

『うおおおおおー！！』

唯先輩の掛け声とともにぶつかりあう両者。いいのかそれで！唯先輩の掛け声でいいのか？

どかつ　ぼかつ　ばきつ　めきやつ　ばりばりつ　ばしつ　どーん
あいしてる　しゅぱっ　ごしゅっ

ありとあらゆる痛々しい破壊効果音が聞こえる。てかあいしてるって何告ってんだよ！

俺は俺で抗争の被害にあわないように避難中。

唯先輩は朝礼台の上でぴょんぴょん跳ねている。そんなに跳ねてるとパンツが見えるっていうおいしいイベントが起きちゃいますよ。

「あ、白」

「隙あり！」

ばきっ！

ほら、早速二次被害。と思いながら心の中でガッツポーズ。

俺はなるべく被害を受けない端っこにこそそそと隠れていた。

向こうで両大將が戦っている。俺にはよくわからないくらい両者共すごいスピードだ。

「食らえ須藤！『サンライズスクリューアッパー』！！」

すごいスピードで鬼嶋先輩のアッパーが飛ぶ。てか名前かけえ！

「甘いぜ鬼嶋！『鋼龍怨婆袈羅』！！」

須藤も木刀を物凄い勢いで振り下ろす。なんか漢字が難しいなあ。

と、両大將の激闘に見とれて無防備な俺に空気の読めないあの人のからの応援が聞こえる。

「こらー！けんちゃん、戦え！」

これはパンツの代償か？唯先輩の一言でヤンキー達の目標が俺へと

変わる。

まあ逃げ出すわけだがあつと言つ間に包囲。絶体絶命。背水の陣。

「覚悟しろよ！清光の最終兵器！」

違つて！

「やつちまえ！」

『おお！』

ヤンキーが一斉に俺に向かつてくる。ああ、終わった。短い人生だったな。もつといい人生送りたかつたぜ……。とその時だ。

「けんちゃんーん！！」

ああ、唯先輩。俺がいなくなつても、どうか俺以外の人に迷惑はかけないでくださいね……。

「けんちゃん！がんばつて！」

そう叫ぶと唯先輩は何を思つたか自分のスカートの裾を掴むと……。真つすぐと上へ持ち上げた……。

俺の目の前に広がる焦燥。その向こう側に見える白い絶対領域。顔を赤らめて恥じらう美少女。

ほわああああ！見えた！俺には純白のサンクチュアリが見えたぜ
ええ！！

ユーリィガガーリンは初めて月から地球を見た時言ったらしい
「地球は青かった」
と。

俺は言う
「パンツは白かった」
と。

俺の中で何かが壊れた。

ここで一度俺は記憶を失う。
こっから先は唯先輩から後で聞いた話だ。

「うおおおお！俺はああ男だああああ！！」

ヤンキーたちに囲まれた俺は謎の発狂と共に暴走。取り巻くヤンキー達を還付無きまでに叩きのめすとそのまま大將戦に参戦。

「誰があああヘタレツツコミ芸人だああゴラああああ！！」

と、わけのわからないことをいいながら乱闘。須藤の木刀を折り、そのままマウントをとりながら意識がなくなるまで殴り続けたそう
だ。

意識が戻ると俺は校庭にボロボロで倒れていた。

「おい！けんちゃん！」

向こうから唯先輩が走ってくる。あれ？なんか素晴らしいものを見た記憶が・・・気のせいかな。

「大丈夫っ？けんちゃん？」

「喧嘩・・・は？」

「僕らの勝ちだよ。」

隣に目をやると須藤が顔をぱんぱんに腫らしてのびている。

「永谷・・・」

「鬼嶋先輩！」

鬼嶋先輩もボロボロだ。

「お前、強いんだな・・・まるで鬼神のようだったぞ」

「・・・？」

「どうだ？俺と共に清光のヤンキーをまとめていかないか？」

「いえ、断固拒否します」

こうして喧嘩。否、お祭りは幕を閉じた。唯先輩も満足そうだ。俺

は全身痛いけどね。

後日、俺はヤンキー達から『鬼神の建さん』と呼ばれるようになった。

episode 9 爆笑教師と大切な人

「美代子違うんだ!」

「嘘つかないで!私は知ってるんだから!あなたが会社の若い子と浮気してるのをっ!」

「そ、それは・・・!」

全部テレビの中の会話です。唯先輩が突然、昼ドラ『愛は機関銃』を見たいと言うのでこの前録画したものを見ているわけだ。

「離婚よっ!」

「話を聞いてくれ美代子っ!」

緊迫のシーンだな。

「あっはははは!」

爆笑してるのは我が部の大将、唯先輩。

「美代子って誰だよっ?あはははは」

うわ、この人話が読めてねえよ!てか全然笑うシーンじゃないって!

と、バカ先輩・・・唯先輩が爆笑していると部室のドアが開いた。

「諸君！青春してるかあ！」

「あ？テツ！」

突然、部屋に乱入して来た男。手塚 慎一。通称テツ。年齢28歳。初回からアホ全開だが一応、お祭り部顧問。

「あははは！なんで若い男女が部屋にこもって昼ドラなんだ？あははは」「あいかわらずよく笑いますね？」

「おお永谷！手永修好通商条約は結ぶ気になったか？」

結ばねえよ！てかなんだその条約！貴様はペリーか！

「それで・・・先生、何しに来たんですか？」

「ああ、実はお前らに大事な話があつてきたわけなんだが」

テツが真面目な顔をする。唯先輩も昼ドラを見るのをやめて真面目な顔だ。

「君たちに任務が下った」

重っ！言葉が重いつて！学校にいてなんで任務が下るんだよ！

「今回のミッションは・・・」

ごく。流れる沈黙。唯先輩はくそ真面目な顔して次の言葉を待っている。

「ミッションは・・・」

「ミッションは？」

「ミッションは」

「ミッションは？」

「ミッションは」

「ミッシ・・・」

「早く言わないとぶっ飛ばしますよ？」

こいつらひっぱり過ぎだ。

「うわーん！けんちゃんか反抗期！」

「昔はこんな子じゃなかったのにな」

お前らは俺の親かつ！

「さて、気を取り直して。今回お前らには校内清掃をしてもらう」「ええー！なんで？なんで？」

唯先輩がめちゃくちや嫌そうな顔をする。俺だって嫌だ。

「実はだな、あまり活動しないのに経費ばかり食ってるお祭り部を学友会が怒っていてだな」

「ふむふむ」

「今回何か学校のためになる何かをしないと経費削減らしいんだよ」「経費削減？それじゃあコーヒー買えないじゃん！」

え！あれって部活の経費で買ってたのかよ！

「と、言うわけだ。行くぞ」

「やだやだ」

「いいから行くんだ!」

テツは唯先輩の首を掴むとそのまま引きずっていった。おお!一応は教師!

というわけで現在校門前。俺は箒を片手に掃除中

「ちいさ〜い頃は〜神様がいてえ〜」

テツが箒にまたがって何かとてつもなくバカなことをやっている。

「・・・教師じゃなかったら血祭りだな」

「お祭り!?!」

唯先輩が目めっちゃ輝かせてこちらを見ている。ホントにやるつもりか?

「しかしあれだな?お前ら部員二人だけで何やってんだ?」

「まあ基本的にはコーヒー飲んでおしゃべり・・・」

「あー!さてはピーしてバキューンでズドドドしてんだな!」

バシィッッ!

「おべっ！」

俺が殴る前に唯先輩が箒でスマツシュしてくれたみたいだ。テツはわけのわかんない声を出して倒れた。

「ここが欧米なら蜂の巣になるとこだからねっ！」

意味わかんねえ！てか欧米荒れすぎだろ！

テツが一眠りしてる間に俺は掃除をすることにした。校門前だけでも結構大変なもんだ。

「けんちゃん、僕疲れたよ〜」

「そうですね。少し休みますか」

「賛成♪」

「俺も賛成♪」

「あ！テツ起きたの？」

「ああ！俺の体は ギガマツスルメタルプロテクト でできてるからな」

嘘つけ。

「いいなあ・・・」

マジで？

「欲しいか？」

変なもんあげんなよ！

「うんっ」

あんたも欲しがるなっ！

「嘘びょん！」

大人げなさすぎだ！

その後、俺はぐずる唯先輩をなだめるはめになった。まったく何やってんだか。

そして、やっと落ち着いてきた頃。

「終わりました隊長！」

「うむ。ご苦労」

俺が罰として命令しといた掃除が終わったみたいだ。まあ自業自得だよな。

「いやあ！疲れた疲れた」

「先生のバカッ！」

唯先輩はまだご立腹だな。

「はっはっはっ！すまなかったな！よし、お詫びに晩飯をご馳走してやろう！」

「やったね♪」

立ち直り早いな。

こうして俺たちはテツに晩飯をおごってもらうべく車に乗った。

ブロロロロ・・・

「テツ、これどこに向かってんの？」

「俺と美代子の愛の巣」

「美代子？」

「お、着いた着いた」

会話の途中だがどうやら目的地に着いたみたいだ。外に出てみると一軒家がある。

「マイホームだ。まだローンが25年も残ってるがな！ははははは！」

それって笑えるのか？

「まあ中に入れ。おーい！美代子！しんちゃんが帰ったぞ！」
「はーい♪」

ガチャ。ドアが開いた。

中からおっとりとした優しい感じの若い女性が出てきた。

「しんちゃん、おかえり♪ただいまのキスだよ。んっ・・・」

その女性とテツはいきなりキスしやがった。

ほわああああ！キスシーンに遭遇しちゃったよ！生キスだよ！
ドラマじゃないよ！どうする？写メか？それとも去るか？それとも
俺も参加か？

「・・・！あ、あれ？お、お客さん？」

どうやら女性はこちらに気付いたらしい。俺も意識をなんとか取り
戻す。

「やだ、私ったらお客さんの前で・・・」

顔を真っ赤にして恥ずかしがる女性。普通に可愛いらしいな。

「いやあ。驚かせてすまない。紹介しよう。妻の美代子だ」
「っ、妻？テツって結婚してたの！？」

さっきから顔真っ赤で恥ずかしがってた唯先輩が驚く。
まあ目の前でキスされたら誰だって恥ずかしくなるだろ。

「妻の美代子です。いつも夫がお世話になってます」

美代子さんは俺らに一礼した。

「美代子って『愛は機関銃』の・・・」

手塚家の食卓。

台所には美代子さんと唯先輩が立っている。二人で晩ご飯を作るようだ。

しかし世の中ってのは何があるかわからないものだ。例えば変態教師の妻が美人だったり。

自慢じゃないが俺には彼女がいたことすらないってのに。神様は不平等だ。てか会ったらぶっ飛ばす。

「永谷どうした？あまりの衝撃に言葉が出ないか？あははははははは！」

「正解だよ、テツ」

「あはははは！実はな一番驚いてるのは俺なんだよ。あははははは！」

隣で爆笑する変態教師。ああ泣きたくなってきた。

「はあ・・・いいもんですね、新婚だなんて」

「そうなんだよ！新婚！球根！二十日大根！なんだよ！あはははははは！」

意味わかんねえええ！

「結婚して幸せそうですね？」

「あははははは！幸せ120%だ！・・・でもな」
「・・・？」

テツの顔が急に真面目な顔つきになる。どうしたんだ？

「大変なことだってたくさんあるんだ」

「大変？」

「お前は中川のコトが好きか？」

「ぶほっ！」

俺は口に含んだ紅茶をリバーズした。

「な、何を急に言いだすんですか！」

「ははは、顔が赤いぞ？」

「・・・それで何が言いたいんですか？」

「つまりだ。お前には死ぬほど好きな大切な、守る人がいるかってことだ」

「・・・？」

テツは遠い目で美代子さんのいる台所を見つめた。

「俺にとって大切な守る人は美代子だったんだよ。そして俺は美代子を守っていくと心に誓ったんだ」

「・・・」

「俺は死んでも美代子を守っていかなければならない。だから大変なんだよ。これは俺にしかできないことだからな」

テツの目には美代子さんがはつきりと写っていた

「テツ・・・」

「なんだ？」

「これ、コメディーなんだけど・・・」

「あっはっはっ！そうか、そうか！すまなかったな！」

テツはいつもの爆笑変態教師に戻った。

「お前も守るべき誰かを早く見つけろよ！あっはははは！」

その時、俺はテツが少しかっこよく見えた気がした。

「しんちゃん。できましたよ」

「けんちゃん！できたよ〜」

台所の美代子さんと唯先輩がごちそうを運んでくる。

「よし！飯食ったら町内ピンポンドッシュ大会だ！」

前言撤回。やっぱりこの人はただの爆笑変態教師だ。

e p i s o d e 9 爆笑教師と大切な人（後書き）

あなたにも大切な人はいるでしょうか？ぜひ探してみてください。
人の心配をしている余裕はないのですが（苦笑）

episode 10 青春の撮影会！

「ふわぁゝあ」

俺は大きなあくびを一つした。今日は日曜日。学校は当然休みだ。

今は自分の家で優雅にランチなんかしているとこだ。と、言っても全部インスタント食品だが。

なぜインスタント食品なのか？

それはいたって簡単な理由だ。家には親がいない。

幼い頃に死んだとか物心ついたときにはいなかったとかそんな暗くてベタな話ではない。ただ単に仕事が忙しくて家に帰ってこないのだ。

「あーあ。暇だな・・・」

だからこうして一人で生活している。ちなみに父親は自衛隊に勤めている。なんだかよくわからないが本人曰く『少佐』の位らしい。それがスゴいのかスゴくないのは俺にはわからないが。

母親は心理学者だ。大学に研究所を作らせてそこにこもっている。なんでも本人曰く『恋と愛の境界線』について調べているらしい。それがどんなものなのか俺は知らないが。

こんな超特殊な職業をもつ二人が奇跡的な出会いをして産まれたの

が俺というわけだ。

「さてと・・・」

俺はカップ麺の空容器を持って台所へ向かう。

昨日、唯先輩が

「明日は恭子とお買物なんだ」

とか言ってたからな。今日は召集がかかることはないだろう。

俺は再びリビングに戻るとソファに身を沈めた。

「やっぱ・・・暇だな」

天井と睨めっこする俺。時々、休日つてのはスゴく暇な日になることがある。たぶん、今日はその日だ。

「手料理・・・食べたいな」

~~~~~

俺の携帯電話が鳴り響く。画面には

【着信中 大橋 秀】

コイツですか。

ピッ

「何か用か？」

「よう！マイフレンドよ」

いきなりうぜえ。

「実はだな唯先輩の居場所を探してるんだが」

「唯先輩？あの人なら恭子先輩と買物に行ってるけど」

「そうなのか！？じゃあお前でもいいや。今から学校に來い」

「は？なんでえ？」

ブチッ！ツーツー

切られた……。有無を問わずに切りやがった。

こうして俺は半強制的に学校へ行くはめになった。

学校に着くと昇降口に秀が立っている。

「よう、建人。こんなところで何してんだ？」

「もういつペン言ってみろ。お前は二度と動けない体になるぞ」

「……ぐすん」

「泣くなっ！んで、用件ってなんだよ？」

「実は今日はお前になぜ炭酸飲料の蓋の裏は青いのか……」

「俺の両手がくく君の血液でくく燃え盛るぜええ！この野郎おお！」

俺は秀の首を掴むと全力で揺すった。

「ま、マグニチュード3・141592……」

え？円周率か？まさかの算数の復習か？

「うっ・・・こつからが本題だ　ヘタレツツコミ芸人」

「殺すぞ？　永遠のチェリーボーイ」

「へへ、照れるな」

いや、照れるとこじゃないからな。

そこんとこ確認しとけよ。

「今日お前を呼んだ理由はだな。　撮影だ写真撮影」

「写真撮影？　そんなに俺有名なのか？」

「いや、お前はマイナーリーグのインディーズだ」

どんだけ無名なんだ？　俺？

「今回、撮影するのはいろいろな理由があつて」

「いろいろな理由？」

「まあただの写真撮影だ」

意味わかんねえよ？　永遠のチェリーボーイよ？

「まあついて来い　惨劇のお花畑」

惨劇のお花畑？　お花畑で何があつたんだ？　てか俺つてもはや人じゃないのか？

そして、俺は秀について行くことにした。　まったく何をする気なんだか。

「ここだ」

「ここって教室じゃなかよ？」

俺は自分の教室に案内された。当然、休みなので誰もいない。

「お前、こんなとこで何するつもりだ？」

「だから写真撮影って言ってるだろ？彩子ちゃん、入っていいよ」

ガラガラ

ドアが開くとそこには二つ縛りの幼なじみ彩子がいた。

「彩子！？どうしたんだよ？」

「大橋君が写真を撮るっていうから・・・」

「おい！秀」

俺は秀を自分の側へ引き寄せた。

「いやぁ・・・実は俺『写真報道部』に入ってるさ」

お前も意味わかんない部活に入ってたんだな・・・。

「それで今度写真コンテストがあつて題材が 若い男女 なんだよ・

・ホントは唯先輩を呼ぶ予定だったんだけど」

「つまり俺に被写体になれと？」

「そういうこと。頼むよ 惨劇のお花畑 ！」

俺は今なぜか彩子と向き合っている。

「二人とも準備はいいか？」

理由は向こう側でピンクの怪しいカメラを手にした男の注文だ。

「ずいぶんと趣味の悪いカメラだな？」

「これか？これは パパラッチ一世 っていうて、オシャレ眼鏡の  
白衣着た先輩からもらったんだ」

博士先輩じゃねえかよ！てかパパラッチ一世って最悪なネーミング  
だな！

「なんと！このカメラ、シャッター音がしないんだぜ！」

やべーよ！やべー匂いがぶんぶんするよ！犯罪は犯すなよ。

「さて、まずは二人でおしゃべりしてるとこだな」

なんでも若々しい高校生の青春の輝きの映像が欲しいらしい。だ  
から場所が教室なのか。

「話すっていつても何を話せばいいのか？」

「そうだね。なんか意識すると難しいよね」

彩子は気恥ずかしそうにはにかんだ。・・・可愛いな・・・って何  
考えてんだ俺は！

「そのはにかみと焦った顔いただき！」

秀はシャッターを押しまくっている。いちいち

「はい、パパラッチ」

って言うのがかなりウザい。

「16連打、コンボオオ！」

格ゲーじゃないんだからシャッターボタン連打してんじゃないよ。

「よし、次の場面！机に座って勉強を教えあう場面！」

この後も青春の輝きの映像の撮影は続いた

・授業中に教科書を貸す場面

・清掃中に片方が箒、片方が塵取りを構える場面

・一緒に日直として黒板を消す場面

そして、一番困った場面……。

・スカートがめくれて不意に見えちゃって恥ずかしいな場面

実際は下にスパッツをはいていたのが若干残念だが撮影用なので仕方ないか……。

「おい秀！まだ撮るつもりか？」

「いや、あとワンシーンだ！」

「大橋君、あとワンシーンって？」

秀はニヤリと悪意に満ちた笑いを見せた。

「窓際でのラブシーンだ！」

『ら、ラブシーン！？』

おいおい、学園物のドラマじゃないんだからそんなことやんないだろ？・・・やるんだね？

俺は彩子と窓際に行く。外からの明かりがいい感じに彩子のちょぴり童顔を照らす。

「なんか・・・恥ずかしいね？」

「そ、そうだな」

彩子は髪をいじりながらもじもじしている。・・・可愛いな・・・  
っていかん！撮影だ、撮影用！

「二人とも。こっち向いて！はい、パパラッチ！」

カシャ・・・という音はしないさすがは パパラッチ一世

「うーん、普通だなあ・・・」

撮った写真を見て不満を漏らす秀。贅沢言っな！

「もっと寄ってくれないかな？」

「こ、こうかな？」

彩子がずいっと俺に寄ってくる。  
近い！近いって！

彩子からもやつぱりいい匂いがする。・・・！俺は変態ではない！

「うーん・・・相手の腰に手を当ててくれない？」

「こっ・・・？」

彩子が俺の腰に手を回す。うわ。結構力入ってるな。

顔の距離は15cmもない。彩子の赤らんだ頬と唇が目の前に見える。

「ほら建人！お前も早くやれよ！」

「え？俺もやるのかよ？」

「建人君・・・お願い」

彩子は俺のことを見上げながら見つめてくる。見つめるな！そんな目で見るな！

・・・可愛い・・・な。

「わかったよ！しますよ！」

俺は彩子の腰に手を回す。たぶんめちゃくちゃ震えていただろう。

俺は彩子を抱き寄せた・・・

唇までの距離は10cmを切っている。ドキドキしてきた。

と、緊張の余り力が入った時だった・・・

ふにつ。マシユマロ状のものが二つ密着した。

「・・・・・・・・!!」

ほわああああ！この感触はああ！マシユマロフィーバアアア！  
ダメだ！落ち着け俺！落ち着くんだ俺えええ！てかいつの間にこんなになったんだ！ガキの頃はなかったのに・・・ダメだ！誰か離してえ！やっぱ離れたらぶつ殺すうう！

「お。建人が自我崩壊したな。ま、いつか！はい、パパラッチ！」

後日、秀は見事コンテストに入賞する。その写真に写っていたのは至福の絶頂に達した顔をした男が美少女を抱いている画だったそうだ。

**e p i s o d e   1 0   青春の撮影会！（後書き）**

今回の投稿の時点で読者数が20000人を越えました！読者の皆様に感謝致します。今後の建人と愉快な仲間たちの活躍にご期待ください！

episode 11 先輩の必勝商売法！

ガヤガヤガヤガヤ・・・

「やっぱり名前載ってないなあ」

「ま、そんな簡単には載らないってコトだな」

俺は今、掲示板の前にいる。定期テストの成績優秀者はここに名前が載るのだ。

「ここに名前が載る奴は真面目ちゃんだけだからな」

ずらーと書かれた名前を見ていく。やっぱり俺の名前はないな。周りは自分の名前が見つかったり見つかなかったりと大騒ぎだ。

「お！建人あれ見てみるよ」

秀が隣の掲示板を指差す。何か見つけたようだ。隣は二年生の成績優秀者、俺たちには関係ないはずなんだが。

俺は掲示板を覗いた。

一位 山岸 学

この人は学友会長だ。さすがは会長だな。

二位 亀田 悟

三位 真壁 恭子

あ、恭子先輩だ。容姿だけじゃなくて頭もいいんだな

五位 佐藤 真理

・  
八位 中川 唯

・  
「ゆ、唯先輩!？」

「お前の大切な先輩じゃないか？」

あの唯先輩が学年で八位とは世の中何があるかわかったもんじゃないな。

「まあ、人は見かけによらないって言うからな」

「そうだけど、あの唯先輩が八位とは・・・」

「僕のこと呼んだ？」

振り向くと唯先輩と恭子先輩が立っている。

「唯先輩! い、いえなんにも」

「今、僕の名前呼んでたじゃん」

「そ、それは・・・」

先輩が八位ってことが信じられないなんて言えないよな。

「はは〜ん。さては・・・」

ギクッ!

「僕のことが恋しくなっちゃったんだね? 仕方ないなあ」

ちげーよ。てかホントにこの人が八位なのかよ？

「そんなことより恭子先輩、三位ってすごいじゃないですか！」「  
ありがと♪私もびつくりです」

恭子先輩は照れながら天使のほほ笑みを見せた。癒されるなあ。

「僕も八位なんだよ！」

「それはよかったですね」

「あ！何その態度？恭子と全然違っじゃん！」

「そうですか？」

「ふん！いいもーんだ」

やれやれ。つくづく子供だな。すぐに妬くんだから・・・

「青春してるか？少女少女たちよ！」

「て、テツ！？」

突然、爆笑変態教師がやってくる。この絡みは何かあったな？

「なんかあったんですか？」

「うむ。またミッシヨンだ」

またミッシヨンかよいい！

「今回のミッシヨンは光陽商店街の『光陽商業祭』の補佐だ！」

祭りというワードを聞いた唯先輩は例のごとく目をきらきら輝かせている。

光陽商業祭。光陽商業者組合による企画で、ようは光陽商店街の活性化が目的ってわけだ。毎年やってるのだからまさか自分が参加するはめになるとは。

「まあお祭り部であるお前らにはもってこいの企画だろ?」

「うんっ」 楽しみだなあ

「ははは!ちなみに明日だからな。ははは!まあ頑張ってこい」

「テツは来ないのかよ!？」

「あつはっはっ!俺は明日は美代子とラブラブドリームイチャイチャマツチがあるからな!あははは!」

勝手にやってる爆笑変態教師が!

テツは爆笑しながら職員室へと戻っていった。まったくもってあの人はホントに教師なのだろうか?

「けんちゃん頑張ろうねっ」

「建人さん頑張ってくださいね!」

「建人!まあ頑張れ!」

「・・・わかったよ」

こうして俺と唯先輩は光陽商業祭の補佐として出向くこととなった。

---

そして翌日。

「よく来てくれたねえ。若いんだから頑張ってくれよ！」  
『はいっ！』

俺たちは今、関係者の休憩所にいる。周りはいそいそと福引きやスタンプリリーなどの企画の準備に忙しそうだ。

「俺の名前は佐々木 誠二。この組合の長で海鮮物の『魚丸』の店長だ」

頭にねじり鉢巻きを巻いた古きよき時代の商業者って感じの人だ。年齢も若く見えるな。

「若いの二人にはまずこれを着てもらおう」

そういうと誠二さんは真っ赤なはっぴを俺たちに渡した。陽光商業者組合と文字がはいっている。

「うわぁ！はっぴだ、はっぴだ〜」

先輩は嬉しそうに着る。さすがはお祭り部部長だな。異様に似合っている。

「今日、若い人には商売の宣伝を手伝ってもらおうかな！」  
「宣伝？」

「おうよ！ともかくどんな手を使ってもいいからこの光陽商店街に人を集めりゃいいってことだ！」

どんな手を使ってもいいってなんか悪意に満ちてないか？

「じゃ若いの！頼んだぞ！」

そう言い残すと誠二さんはいそいそと自分の持ち場へと戻っていった。

「よし！けんちゃん行こっ」

俺たちはとりあえず商店街の入り口へと移動することにした。

「さて、どうしますか先輩？普通に呼び込みしますか？」

「えゝ！普通じゃつまんないよ」

そうでしたね。だってあなたが普通の人じゃないですもんね。

「あのねけんちゃん？僕にいい案があるんだ！」

「いい案？」

「ちよつと耳貸して！……ごによごによごによ」

「……………マジすか？」

---

なぜか俺の頭に毛むくじゃらの耳が付いている。鼻もちよつとおかしい。ぼさぼさの尻尾まで生えている始末だ。

「よし！できたっ」

「先輩・・・これは？」

「狼男の完成っ」

先輩はにこにこしながら俺を見ている。今の俺の姿はまさしく狼。先輩が客寄せに提案したのは仮装だったのだ。

「なんで狼なんですか？」

「女の子を食べちゃいそうだから」

さらっとエグイこと言うな！てか危ない意味合いもってるだろ！

「よし！けんちゃん宣伝するよ」

商店街入り口。

「ただいま陽光商業祭実施中です！」

「ぜひ立ち寄ってください」

「今なら全品100%オフです！」

100%オフ！？オフし過ぎだろ！それじゃあ商売になんねえ！

「今なら『もってけ泥棒』キャンペーン実施中です！」

どんなキャンペーンだよ？ただのやけくそじゃないのか？

「さらに！今ならポイント30倍です」

うわ！ポイント速攻で溜まるじゃねえかよ！

「ママ〜！なんかスゴいお祭りしてるよ！」

「ホントね。すごく安いわ！」

その親子！信じるな！

「今なら！僕があんなことやこんなことしちゃいます」

先輩！？色仕掛けですか？危険ですよ！そんなことすると。

「ぐふつぐふつふふ。何してくれるのかな〜？」

「はあはあ・・・我慢できませんよ」

やべー！変態寄ってきたよー！

「まずは商店街でお買物してくださいね？」

『よっしゃあ！買い物するぞお〜！』

変態たちはみんな商店街へと走っていった。頑張れよ変態ども。

「恭子って実はエッチなんだよ！」

「うそつけ！それはあんだだろ！」

「僕ってホントは中学生なんだ！」

「タイトルを『こっちはいつ！』に変えなきゃ！」

「今回で最終回です」

「勝手に終してんじゃねーよ！」

『おい！あそこにつっこむ狼男がいるぞ！』

「すげー！今の時代は狼もつっこむのかあ」

さすがお笑いブーム！

「なに？なに？芸人でも来てるの？」

ギャラリーめっちゃ来たー！よくわかんねえけど俺がツッコミ狼男になってるし！

「けんちゃん！大成功だね！」

「え？これ狙ってたの？」

『おおー！突っ込んだぞ！』

「がんばれー！ヘタレツツコミ狼芸人！」

ギャラリーうぜええ！てか最後の奴！どっかの誰かさんみたいなのと言ってるじゃねえーよ！

こうして唯先輩の策略？により人はそろそろと商店街に入っていた。まあかなり型破りな宣伝だが唯先輩らしいな。

夕方。

「ふいー。疲れたねっ！」

「先輩のせいですよ」

「えへへ。ごめんなさーい」

唯先輩は舌をチラツと見せながらペコリと頭を下げた。

「いやあ若いの！大したもんじゃねえか！」

「誠二さん！」

「お前たちのおかげでいつもより2倍も儲かつちまったよ」

「えっへん！僕らにかかればこんなもんだよ。ね？けんちゃんっ」

かなりムチャクチャだったけどな。てか犯罪一步前だっただろ？

「今度お前らには新鮮な魚を食わせてやるからな！」

「やったあ」ありがとマサさん！

「いいってことよ！」

こうして俺たちの仕事は終わった。いやあ、疲れた疲れた。

「ね？けんちゃん！」

帰り道に突然何かを思い出したように唯先輩が振り向く。

「なんですか？」

「僕たちお笑い芸人デビューしよっか？」

絶対しません。

## episode 12 先輩と星に願いを

梅雨も過ぎて間もなく季節は夏。俺が高校に入学してから3ヵ月近く経つってわけだ。

そして今俺は部室にいる。そして、目の前には美少女迷惑先輩と白衣をまとった先輩がいる。白衣はそろそろ暑くないか？

「ときに中川氏。七夕に関してどう思いますか？」

「七夕？楽しいよっ」ね？けんちゃん！

「そうですね。子供の頃はよく短冊なんて書きましたよ」

「もうけんちゃんったら今でも子供じゃん！」

あんたに言われたら俺も終わりだな。

「お二人は天の川はご存じですか？」

「あの、星群のことですよね？」

「はい。日本では織り姫と彦星の間に流れる川だなんていわれますが外国ではmilk way（牛乳をこぼしたような道）なんて言われています」

「ほえ」

「日本では報われない悲劇の恋の舞台ですが外国ではただの牛乳の跡です。おかしな話ではないですか？」

「あははっ」牛乳をこぼす子供なんてけんちゃんくらいだよ！

「先輩？誰が子供ですって？」

「・・・なんでもないよっ！」

まったくこのガキ先輩は仕方ないなあ。博士先輩も何が言いたいんだか。

「む！もつこんな時間ですか。僕はこれからギャルえもんの最終点検をしますのでここらへんで失礼します」

「頑張つてね」

おい！そのヤバいロボット完成間近なのか！？

博士先輩は不気味な笑みを浮かべながら部室から出ていった。

「僕たちも帰ろっか？」

「そうですね」

そろそろ夕方だ。俺たちも部室をあとにすることにした。

帰り道。

すっかり日が延びたせいでまだまだ外は明るい。

「ね？ね？けんちゃん！」

「なんですか？」

唯先輩がにこにこしながら話かけてくる。なんか思いついたのだからう。

「七夕しよーよ！」

「七夕をする？」

「そうだよ！仙台では日本三大祭りの一つ『七夕祭り』があるんだよ？だから僕たちも盛り上げるの！」

さすがはお祭り好き。こういうことに関しては詳しいな。

「やろーよ！一緒に天体観測！題して『牛乳こぼして三千里』！」

牛乳こぼして三千里？こぼしすぎだろ！どんだけ牛乳を飲むのがヘタクソなんだよ！

「まあ・・・いいですけど」

「やったあ♪」

唯先輩はびよんびよん飛んでおおはしゃぎだ。

なんか俺、先輩に甘いよな？ま、楽しいからいいか・・・別に深い意味はないからな！

こうして俺と唯先輩は『牛乳こぼして三千里』をすることになった。

---

七月七日。

今日は唯先輩が待ちに待った七夕。いちばん天の川がよく見える日だ。たぶん。

「七夕ですね？」

「・・・ぐすつ」

俺は窓の外に目をやる。

ザー・・・。

外は雨が降っている。

「・・・ぐすん・・・」

先輩はさっきからぐずっている。

「仕方ないですよ・・・こればかりは」

「うつ・・・お天気お姉さんのバカあ！」

コラコラ。 天気を決めてるのはお天気お姉さんじゃないぞ。

「けんちゃくん！雨雲全部吹き飛ばしてよ」

「無理ですっ！」

「ぐすつ・・・空にミサイルが打ち込めたらよかったのに」

危ねえよ！私情でミサイル打ち込むんじゃねえ！

「先輩、今日は諦めましょう」

「やだやだ」！

「よしよし。また今度行つてあげますから」

俺は先輩の頭を優しく撫でた。 ホントに何やってんだか。

「うつ・・・今日行きたかったなあ」

よっぽど行きたかったんだろうな。でも雨じゃあどうしようもないからなあ。

「今日は帰りましょぅよ」  
「・・・うん」

俺たちは部室を出た。先輩はぐずりながらとぼとぼと歩いている。結局、テンションの下がったまま俺たちはそれぞれの帰路についた。

ガチャ

「ただいま……って誰もいないか」

俺は自分の部屋のベッドに寝転んだ。

「唯先輩なんだか可愛そうだな」

前々から楽しみにしてたからな……。どうにかしてあげたいけどなあ。先輩のあんな顔を俺は……。あ、あれ？眠くなつて……。き……。た……



「  
・  
・  
・  
・  
・  
ん  
・  
・  
ん  
あ  
」

「・・・！寝ちゃったのか？ん？ケータイ？」

寝呆けた俺の耳に着信音が鳴り響く。

「なんだろ？」

携帯を覗き込む。どうやらメールのようだ。誰からだろう？・・・えーっと

「・・・唯先輩！？」

メールの送り主は唯先輩からだ。

【学校の前でまってるよ♪ひとりぼっちは嫌だから早く来てね！】

「学校の前？雨が降ってるのにか？」

俺は外に目をやった。

「・・・晴れてる」

外の雨はいつのまにか止んでいた。よくはわからないがこれで天体観測ができる。俺は学校へと向かった。

学校前。

「先輩！」

すでに唯先輩は来ていた。

「あ！けんちゃん！よかったよ〜晴れてっ」

「よかったですね？先輩！」

「うん、空にロケット打った甲斐があったよ！」

「え！ロケット！？」

「うん。ロケット花火」

なんだ、ロケット花火か。この人なら本物のロケット打ち込んでもおかしくないからな。

「よくそんなに晴れましたね？」

「火薬いっぱい詰めたから！」

危ないからよい子は真似しないように。

「よし！行こうっか？」

「行きましよう」

俺たちは夜の学校へと侵入した。侵入口は昼間に確保していたってわけだ。向かうはずばり屋上。

「夜の学校って怖いよ〜」

「大丈夫ですよ。先輩は怖がりですね」

「だってえ〜」

先輩は俺にぴたっとくっついてくる。

「先輩！？そんなにくっつかないでくださいよー！」

「けんちゃん！男の子でしょ？」

また人のことからかつて。その気もないくせに……。

「ほら、もう着きますよ」

ガチャ。屋上の扉を開ける。

『うわぁ〜』

目の前に瞬く無数の星々。すっかり暮れた夜空の上では一層輝いて見える。その中でも一際輝いている星群が天の川だ。いくら見えても飽きないくらい綺麗な星空だな。

「綺麗……」

「すごいですね」

「よしっ！『牛乳こぼして三千里』開始だよ！」

先輩は置いてあるベンチに座ると隣をバシバシ叩いている。ここに座れるってことか。

「早く！早く〜！」

「今、行きますよ」

俺も先輩の隣に座る。それにしても綺麗な星空だな。

「綺麗ですね？」

「うん」

星空を俺たちは黙って見上げていた。なんていうか……俺には似合わないがロマンチックだ。

「会えたかな？」

「会えた？誰がですか？」

「織り姫と彦星」

「俺はきつと会えたと思いますよ」

「うんっ」

唯先輩はニコツと笑った。俺も自然とほほ笑み返す。やっぱり先輩には笑顔がよく似合うな。

「織り姫と彦星は禁断の恋だったのかな？」

「そうですね。昔の人はそういうのに厳しいそうですから」

「僕も・・・織り姫と一緒になのかな？」

「え？」

ふと先輩の表情が暗くなった。が、それはすぐに元の笑顔に戻った。

「うん。なんでもないの」

「・・・？」

「あ！そういえばお願い事してないよ！」

「そうですね」

「僕、ちゃんと決めてきたんだ！」

「へえ？なんですか？」

「毎日、お祭りができますようにって！」

そんなに体力とテンションが保つのはあなただけです。てか毎日してたら騒々しいっての！

「あ！けんちゃん！流れ星だよ！願い事なくっちゃ！」

先輩は急いで目を閉じて両手を合わせた。俺もなんか願い事しなくちゃ！

（うーん。とりあえず平和でありますように・・・よし！）

俺は目を開けて唯先輩を見る。まだ願い事中みたいだ。

なんだか月明かりに照らされて願い事している姿がとても可愛らしく見える。

それを見て俺はもう一度願い事をした。

（さっきのはやめて・・・）

「終わったあ！」

「ずいぶんと長かったですね？」

「うん！たくさんお願いしちゃった、けんちゃんは？」

「秘密ですよ」

「えー！？教えてよー！」

「ダメですよ！」

「うー！けんちゃんのケチ！」

唯先輩は頬を膨らませている。恥ずかしくて言えるわけがない。俺がお願いしたことは・・・

『唯先輩やみんながいつまでも笑っていますように』

だっただからね。

episode 12 先輩と星に願いを（後書き）

Milky wayの意味は作者が勝手に考えて博士先輩に教えました（笑）ホントの意味は違うかもしれませんが（汗）いよいよ夏の到来です！あんなことやこんなことがある予定なのでご期待を！

## episode 13 ファンクラブの苦悩

放課後。

今日は唯先輩が課外があると言うので部活は休みだ。秀は例の『写真報道部』の活動。というわけで俺は彩子と一緒に家に帰ることになった。

そして現在俺たちは陽光商店街を歩いている。目的は喫茶店のプリン。こういう寄り道は高校生の楽しみの一つだ。

夕方の商店街は放課後にぶらつく学生や夕飯の買い物に来た主婦で混んでいる。

「うわあ。混んでるね?」「そうだな。みんな来るとこは一緒なんだな」

「こうやって二人で歩いてるとさ・・・」

「・・・ん?」

「私たち付き合ってる・・・みたいだね／＼」

彩子は顔を真っ赤にしながらうつむいている。やっぱりこういうところが可愛いよな。

「ははは。そうだな!他人から見れば俺たち恋人みたいだな?」

「うっ、うん／＼」

彩子はさらに顔を赤くさせてもじもじしている。ホントに純粋な子だな。

「でもいいじゃんか？俺は彩子と恋人なんて悪い気はしないけど？」

「ホントに？」

「てか、俺に限らず世の男はほとんどそうだと思うけどな！」

彩子は社会一般論から言えば美少女なのだから当たり前だ。

彩子は顔を赤らめながらニコリと笑った。

「あ！あそこだよ！」

彩子の指差す先にはまだ新しい感じのオープンカフェがある。あそこにおいしいプリンがあるのか！

「建人君いこっ！」

彩子は俺の手を引くとそのまま喫茶店へと入っていった。

俺たちは一番端っこの見渡しのいい席に座った。

「いらっしやいませ」

「プリン・ラ・クリームください」

「少々お待ちください」

あとはプリンの到着を待つのみだ。

「そつえばこの前、大橋君に頼まれて撮った写真優勝したんだよね？」

「ああ。意外な才能を発揮させやがって」

「大変だけど楽しかったよね」

「あ、ああ・・・」

俺はあの時の感触の原因を横目で見る。ホントしばらく会っていないうちに・・・いかん！何を考えてんだ俺は！

「・・・？どうしたの？」

彩子が不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「いや、なんでもないんだけどさ」

俺はごまかしながら通りに目をやる。ホントにこの時間は盛り上がるな。これも俺と唯先輩のおかげかな？・・・ん？

視界に謎の集団が写る。獄怨のやつらみたいだ。何かを囲んでるみたいだけど・・・

「なあ？あれなんだ？」

俺は謎の集団を指差す。

「さあ？なんかよくわかんないね・・・」

彩子にもよくわからないらしい。まあ触らぬ神に祟りなしだ。最近トラブル続きだからな。今はプリンをゆっくり待とう。

「もう！あっち行ってよ！」

ふと集団の中から少女の声が聞こえる。いかにもトラブルって感じ

だかここはスルーだな。今はプリンだ。

「なんなのよ！どいて！」

おお、やってるな。だが俺は反応しないからな……。あれ？なんか、向こうから女の子が走って……。きてるよお！！なんでえ！？

あろうことか声の主は俺たちの方へ走ってきたではないか！そして・

「とうっ！」

超絶的な跳躍力でテラスの柵を越え俺たちの前に着地した。

「ふう……。」「

一息つく少女。よく見るとめっちゃめっちゃ可愛いな。俺と年は同じか下くらいかな？少し茶色い髪を頭の上でポニーテールにしている。たぶん唯先輩並に元気そうだな。なんせ柵越え少女だもん。

「あ！ちよつとの間かくまって！」

「え？」

そういうとポニーテール少女は俺たちのいるテーブルの下へと入っていった。

「ちよつ！おい！」

あちゃー！トラブルに巻き込まれたよ！こうなったら逃げるか？それとも実力行使か？いかん！それでは男が廃る！あー！どうすれば

あ！

「この店に入ったよな？」

「ああ。そうだ」

うわ！人が試行錯誤してるうちに獄怨のやつら来ちゃったよ！

「よし、捜し出すぞ！」

獄怨のやつらは店内を詮索し始めた。営業妨害だぞおい！

「建人君、怖いよお・・・」

彩子は心配そうにしている。獄怨のやつに絡まれなければいいのだが。

「おい！お前ら！」

早速かよっ！

「な、何すか？」

「ここにポニーテールの中坊が来なかったか？」

「さ、さあ？」

「そつか・・・ん？君は！」

彩子に気付いた獄怨のやつは急に感嘆の声をあげた。

「彩子ちゃんだ！」

「なんだって！？」

「彩子ちゃんがいるだと!？」

な、なんだこいつら? みんなして『彩子ちゃん』なんて言いやがって。彩子もきよんとしている。気付くと俺らは獄怨軍団に囲まれていた。

「な、何なんだよ? お前ら」

「こんなところで彩子ちゃんに会えるなんて!」

シカトかよ? おい!

「あ、あのあなた方は?」

「俺たちは獄怨高校の者です」

「んなの制服見ればわかるっての・・・」

「んあ?」

やべっ! 口が滑った! こつちめっちゃ見てるよ・・・。

「・・・あ! お前! 清光の永谷建人だなっ?」

「そ、そうだけど」

「神崎さん! 鬼神の永谷がここにいます!」

「神崎?」

ヤンキーの後ろからリーダーっぽい奴が出てきた。てか俺は鬼神じゃないぞ!

「何? 須藤を倒したあの永谷か?」

神崎は俺を睨み付けてくる。怖いんですけど。

「・・・で？なんでお前は彩子ちゃんと一緒にいるんだよ？」

うわ！ちゃん付けかよ！似合わねえ！

「なんでって一緒にプリンを食べにきただけだよ」

「一緒に・・・だと！？おい！お前らコイツをぶっ飛ばせ！」

謎の因縁だー！意味不明にもほどがあるぞ！てかこれって危機じゃん？

「ま、待て！落ち着け！お前らは彩子の知り合いなのか？」

「あ？」

さっきまでいきり立っていたヤンキー共が落ち着く。何はともあれ危機は回避できた。

「俺らはだな！」

「俺らは？」

「・・・」

「・・・？」

「彩子ちゃんのファンクラブだあ！」

誰か助けてー！不良がファンクラブ作ってるよー！アウトローにも限度があるだろ！

「俺らはな、須藤から嫌われた連中。No.2のグループなんだよ！」

「No.2のグループ？」

「ああ。須藤は獄怨を我が物顔で支配してやがる！あいつは権力も

地位もあげくに女まで独占してやがるんだ！」

「ふむふむ。まあ須藤は強いからな」

「そんな俺らの心の癒しは正統派女子高生がいる清光高校なんだよ！」

正統派女子高生ってなんだよ？ 邪道な女子高生とかいたら怖いだろ！

「その中でも選りすぐりの女の子を俺らはヤンキーのための癒される正統派女子高生。通称『Y I S』と呼んでいる」

なんかやばい方向に進んでませんか？ 『Y I S』ってどこの国際機関だよ？

「彩子ちゃんは『Y I S』のN o . 2だ！」

「ん？ 待て！ N o . 2 ってことはN o . 1 もいるんだろ？」

「ああ、そつだ。N o . 1 は我らが女神、中川唯ちゃん！ 通称『ゆいゆい』だ！」

まさかの唯先輩登場じゃねえか！ てか『ゆいゆい』ってなんだ？ 動物園のパンダみたいな名前付けてんじゃねえよ！

「ゆいゆい、癒されるよな」

「あの元気いっぱいなところがたまらないよなあ」

ヤンキーたちが唯先輩の話で盛り上がっている。一生やってろ。

「そんなくだらないことしてんの？」

「！？」

テーブルクロスからポニーテール少女が現われた。すっかりコイツの存在を忘れてたな。

「あー！お前は須藤の妹で捕まえて須藤を脅す糧にしようとした、名前は須藤 まどか！」

現状説明ご苦労様です。

「ふん！長々と説明してんじゃないわよ！このモテない軍団が！」

ひでーなおい。モテない男は辛いんだぜ？

「ガガーン！」

「ベタなりアクションね？この万年童貞組が！」

ツッコミがキツいな。どうやらこの少女はかなり気が強いらしい。

「うう・・・もう生きていけない」

「じゃあ死になさい！」

「お、おい！これ以上言うとこいつらマジで女性恐怖症になっちゃうからやめとけ！」

俺は暴走する須藤の妹を止めにかかる。ヤンキー達は精神的ダメージで打ち拉がれている。同情するよ。

「・・・あんたが永谷ね？」

「あ、ああ。そうだけど」

少女は俺をじろじろと見る。恥ずかしいんですけど。

「弱そう」

「なっ!？」

「めっちゃくちゃ弱そう。てかヘタレっぽい」

うわーん！ヘタレって言われた！初対面でヘタレって言われたよー！

「ホントにあんたがお兄ちゃんを倒したの？」

そういえば俺って須藤を倒したんだよな。記憶にはないけど。

「そうには見えないんだけど」

「ほ、ホントだ！」

覚えてないけどなっ！という言葉は言わないことにしよう。

「そう？じゃあここにいるヤンキー倒してよ？」

「は？」

「できるでしょ？」

「無理だ！」

普通に考えて十人弱いるヤンキーを倒せるわけがないだろ！俺は普通の男子高校生だっつーの！

「無理でもやってもらっわ！」

須藤の妹は不気味な笑みを浮かべた。

「みなさん！この人今夜、彩子ちゃんとバキューンしてピーした後ズババツするって！」

「バキューンだと!？」

ヤンキーたちは放送禁止用語に反応、殺気を全開にしてこちらに近づいてくる。

「お、落ち着け!全部嘘だっ!」  
「ぶっ殺」

聞こえてねー!もうダメだ。なんとなくこの展開わかってたけど俺は殺されるんだー!

ブンッ!バシッ!  
「いてっ!」

俺は吹っ飛ばされた。呆気なく倒れる俺。弱い俺。

「建人君!大丈夫!？」

彩子が駆け寄ってくる。優しいな彩子。俺は彩子の方へ倒れたまま目をやった。

彩子のスカートが見えた。

彩子の太もが見えた。

彩子の・・・パンツが・・・見えた。

ほわああああ!また見ちゃったよ!この角度からは丸見えじゃねえかあ!ヤバイ!体が!体が熱くなってきたああああ!!

「見えたアアア!ピンクのドリームトライアングルが俺には見えた

ああああ!!」

何かが壊れた。

俺はそこで記憶がなくなってしまう。

記憶が戻った時。周りにはヤンキーが倒れ、彩子は恐怖に怯え、須藤の妹は満足そうに笑った。

・・・もしかして俺またやっちゃった？

パンツって偉大な力を持っているんだな。

「すごい・・・お兄ちゃんを倒す男だけあるわ!」

あ、恐縮っす。

「助けてくれてありがと。またねっ!鬼神さん」

須藤の妹は手をひらひら振りながら店から出ていった。・・・また厄介なやつに関わっちゃったな。

「プリン・ラ・クリームお待たせしました」

・・・とりあえず食べとくか。

## episode 13 ファンクラブの苦悩（後書き）

せっかくの登場キャラである彩子とまどかの活躍が文字数を調整しようとしたら減ってしまいました。（汗）まどかは再び獄怨絡みで登場！・・・の予定です。読者数が13話投稿の時点で3000人を越えました！読者の皆様、本当にありがとうございます。

episode 14 夏と両親がやってきた！

「では、みなさん素晴らしい夏休みを過ごしてください」

長い校長の話が終わった。今日は終業式。一学期も今日で終わりだ。俺たちは教室に戻る。このあとは通知表が返ってくる。まあ今回はなんとかなるだろう。

「永谷 建人！」

通知表を受け取る。・・・うん。まあまあだな。

——— 長い夏休みが始まった。

放課後。

俺は唯先輩に呼ばれて部室へと向かった。まったく終業式の午後くらいゆつくりさせてもらいたいもんだ。

ガチャ。

「あ！けんちゃん！」

「先輩、用ってなんですか？」

唯先輩は夏服を身にまとい今日も元気いっぱいって感じた。まあ元

気なかつたら不気味だけど。

「うん、実はね！」

「実は？」

「けんちゃん家に家庭訪問しようと思って！」

いきなり急展開じゃねえか！てか家庭訪問って先生みたいだからやめろ！

「な、なんでですか！」

「だって、夏休み中会いたいときに会えるようにしたいし、なんかあった時にかくまってほしいし、緊急避暑地として……」

要は暇つぶしだな？バカ先輩？

「別にいいですけど……何もないですよ？」

「やったあ♪よし！いいこっ！いいこっ♪」

先輩はうれしそうに部室を飛び出た。おいおい、あんまりはしゃぐんじゃないよ。

こうして唯先輩が俺の家に来ることとなった。

俺の家。

家に着いた途端ソファに座り唯先輩は早速駄々をこねはじめた。

「けんちゃん暑い〜！クーラー！麦茶〜！ペンギン〜！」

うぜえ！暑いから余計にうぜえ！てかペンギンはここにいねえよ！それに別にペンギンいたって涼しくならねえよ！

「今、全部やりますから、黙っててください」  
「う〜」

まったく世話の焼ける人だな。俺はクーラーの電源を入れ、麦茶を持っていた。

「いただきまーす♪んぐっんぐっんぐっ・・・ぷはあー！」

ぷはあー！ってビールじゃないんだから。もうちょっと女の子らしくしろよ。

「生き返ったあゝあれ？そういえばお父さんとお母さんは？」

「二人とも仕事です」

「へえ、大変だねっ？」

「まあ、仕事が生きてみたいなもんですから」

まったくあの二人といったらほとんど帰ってこないんだから。帰ってくる日は年末年始と自分の誕生日とそれから通知表を見るに・・・あ。今日って確か・・・。

チュドーン！！

非日常的効果音が玄関が聞こえた。

「けんちゃん！玄関から爆破音が聞こえたよっ！？」

さすがの唯先輩も異常事態に気付いたらしい。いつもはあなたがこんな感じで非日常なんですよ？

「ちょっと様子見てきますね」

俺は玄関へ向かった。玄関は爆破のあとで煙が立ちこめている。

「……誰だか知らないけど、犯人ぶっ殺」

俺は煙の中へと入っていく。マイホームを壊した犯人を絞めなくては。

「甘いぞ！」

一瞬黒い影が見えた。と思ったときには俺は首を絞められている。しかも頭には鉄の殺人器。拳銃が突き付けられている。

「……父さん、離して」

「息子よ、ここが戦場ならお前の負けだぞ？」

俺の首が解放される。振り返るとそこには髭を生やしたごつい男。俺の父さんが立っていた。

「……おかえり、父さん」

「お前の父、永谷 彦一は今帰ったぞ！がはははは！」

「ところで父さん、ドアをどうしてくれるんだよ？」

「インターホンが壊れてたからグレネードでドカーンとなっ」

ドカーンじゃねえよ！てかそんなことでいちいち殺傷武器使っんじやねえ！

「父さん、また軍の武器庫をちよろまかしたんだ？」

「ああ！あそこはお宝がたくさんあるからな！がっはっはっはっ」

笑えない！全然笑えない！それって犯罪だろが！

プップー！

アホな父さんに呆れていると外からクラクションが聞こえた。しかもその音はだんだん近づいてきている。

ガッシャーン！

再び非日常的な効果音が目の前で聞こえた。

俺の目の前に、玄関に突き刺さる車が見える。てかすでに『玄関』という原型は留めていない。

ガチャ。

「ふう。疲れたわ」

中から白衣を来て眼鏡をしたすらった女性がでてきた。

「母さんっ！」

父さんが大声をだす。この女性は俺の母さんなのだ。

「・・・母さん、おかえり」

「あなたの母親。永谷 洋子は今帰ったわよ。」

父さんみたいなこと言ってんじゃねえよ。

「母さん、これはどういうことなの？」

「玄関が開いてたから大学の車で突っ込んだのよ？心理学的に見ても自然な行為よ」

嘘つけ！どんな心理になれば車ごと玄関に突っ込むんだよ？

「がはははっ！久しぶりに家族がそろったな？」

「そうね！研究所もいいけど我が家もいいわね！」

「俺は二人が帰ってきて疲れたよ」

見ればわかるように俺の両親は純潔の変人だ。この人たちに常識も法律もないからな。

二人は家の中へと入って行った。俺もリビングに戻る。

「なあ？建人？」

「ん？」

「あの少女は誰だね？」

「あ！」

唯先輩はソファの上でカタカタと震えている。爆破音がよつぽど恐かったのだろう。軽く涙目だ。

「がっはははは！そうか建人の先輩だったのか！」  
「そうなんですっ！けんちゃんは僕の後輩なんです♪」

俺の目の前で父さんと唯先輩が話している。同じ変人同士気が合うらしい。すぐに仲良くなつたみたいだ。母さんかというと台所で昼飯を作っている。

「いやあ、てつきり俺は建人の女かと思つたよ！」

「そんな、おじさんつたら！恥ずかしいです／＼」

「ふはは。建人も隅におけないなあ！こんな可愛い子を家に連れ込んで！」

「連れ込むってか勝手に先輩が来ただけだし！」

「またまた！どうせエッチなことしようとしてたんだろ？さすがは父さんの息子だな？」

「けんちゃんのエッチ〜！」

なんだこいつら！なんか俺がエロキヤラみたいじゃねえか！……  
・そうなのか？

「そつだ！お前に手土産がある」  
「手土産？」

父さんは大きなバックからなにかを取り出した。

「AK-47だ。ロシア軍が昔使ってた野戦用の突撃銃だぞ！」

うわー！この親父手土産に銃持ってきたよ！目的はなに？目的はなんなんだー！

「いいなあ、けんちゃん」

え？欲しいの？あなたはこれが欲しいの？

「よし、じゃあ唯ちゃんにはこのRPG-4ミサイルランチャーを・  
・・」

「父さん。これを引けば弾がでるの？」

「父さんが悪かった！悪かったから銃を父さんに向けないでくれ！」

とつとしまえ！こんな物騒なもん！つたく先輩にミサイル渡したら町の一つや二つ壊しちゃうっての！

「ふふふ。盛り上がってるわね」

母さんが料理を運んでくる。久しぶりの手料理だ。

「心理学的に両思いになれる料理よ。ね？建人？」

なんで俺に同意を求めるんだよ！てか料理と心理って関係あんのか？

「あ、父さん。母さんに惚れ直したみたいだ。母さん今夜は父さん

と・・・」

「建人？ここを引けば弾がでるのね？」

「うん」

「父さんが悪かったから！母さん、銃を構えないで！安全装置を外さないで！」

ホントにつくづく疲れる人だ。

「ところで母さん、恋と愛の違いは解明できたの？」

「ええ。恋は下心で愛はまごころなのよ」

よく言っていることがわからないがそういうことなのだろう。

「今、研究してるのは恋が愛に変わる時とその要因なの。年末までにはなんとか解明したいわね」

「がんばってね、母さん」

「建人！父さんはな！やっと中佐の位につきそうなんだぞ？」

「へえ」

「それに来月からは兵士と諜報員を兼ね備えた任務があるんだ」

「へえ！おじさんカッコイイ！」

「そうか？唯ちゃんもホントにいい子だなあ」

「えへへっ」

まったくなんだか唯先輩も家族の一員みたいだな。

「そういえば浜崎さんのところのお嬢さんがあなたと同じクラスなんですよ？」

「ああ。まさか帰ってくるとは思わなかったけどね」

「そう。ふふふ、三角関係によって生じる情緒の研究に使えるわね」  
なんかさらっと怖いこと言ったよな？

「そうだ！せっかくだから唯ちゃんにも野戦向き突撃銃の使用方法を教えよう！」

「やったあ！」

二人はベランダへと向かった。普通、ベランダで銃の使い方を教える人間なんていないよな。

「そういえば建人は小学生の時には麻醉銃が使えるようになってたわよね？」

「う、うん」

俺もあのアホ親父にいろいろと戦闘方法を教えられた。もっとも使うような場面に遭遇したことなど一度もないが。てか遭遇したくない。

「違う！肩にしっかり固定して、標準を合わせるんだ！」

「イエッサー！」

何やってんだか。

「ふふふ。楽しそうね。私も付き合おうかしら」

母さんはベランダへと走っていった。まったく三人して何してんだよ。でもすごく楽しそうだ。

「おい！建人もこっち来い！」

「あなたもたまには体を動かさない!」  
「けんちゃんも教えてよ!」

「たく仕方ないな。」

「今、行くよ!」

夕方。

「じゃあ二人とも気を付けて」

「三角関係になったら私をいつでも呼びなさいよ」

「がははは!今度は狙撃銃を持ってきてやるからな!」

言いたいことを言うと二人は夕日へと姿を消していった。

「じゃあ僕も帰るね!」

「いいですけどその危険物を置いてってください!」

「ちえっ!つまんないのだ!」

唯先輩は黒い鉄の固まりと鉛の弾を置いた。こんなもの世に一回つたら大変だ。

「けんちゃん、楽しかったねっ」

「俺は疲れました」

「ふふっ、楽しそうな顔してたよ?おじさんとおばさんと一緒にいるとき」

「そ、そうですね？」

「うん。とってもね・・・」

唯先輩は少し遠い目をした。

「・・・？」

「じゃ、僕もう帰るね。バイバーイ♪」

先輩は手をぶんぶん振りながら夕日に消えた。なんだろっすごく暖かい気持ちになった気がする。

「さて・・・」

俺は振り向いて我が家の玄関を見た。

「直る・・・か？」

俺は玄関の修理を始めた。夕日が沈むその前に終わらさなきゃな。

覚えとけよ？バカ両親っ♪

episode 15 夏と先輩と先生と

夏とは何か？それは人によって感じ方も過ごし方もちがうだろう。  
んで俺はと言つと……。

---

「暑い……」

照りつける太陽が容赦なく俺から水分を奪う。

「暑いよ！暑いよ！」

……この人からは水分は奪えても元氣は奪えなさそうだな。

俺は今プールの底にいる。水の入っていないプールだが。

「お前ら掃除しろ」

テツがプールサイドにパラソルを立てて寝ている。学校のプールサイドに変なもん立ててんじゃないやねえ

今日は学校のプールの掃除をしている。理由はそこで寝ている爆笑変態教師が生徒会から請け負ったからだ。

「けんちゃん！早く掃除しろ！」

先輩は縦横無尽にプールの底を走りまわっている。まあ掃除になつてからいいけど。

「早くしないと日が暮れるぞ」

「先生？何かいいましたか？」

「落ち着け！その振り上げたデッキブラシを下ろすんだ！」

まったくいつもこいつも厄介事に巻き込みやがって。

「しかし女子高生のスクール水着ってのはたまらんなあ」

「何バカなこと言ってるんすか？」

「ほれお前も見とけ」

テツは俺の頭をつかむと先輩の方に無理矢理向けた。

・・・ごくり。

「今、生唾呑んだろ？」

「はい」

ここら辺は想像にお任せしよう。発展途上なアレが窮屈そうに収められている姿は世の変態が喜びそうだ。

「って何見せてんすか！？」

「目の肥やしだよ」

先生よ頼むからまともになってくれ。そしていい映像をありがとう。

「おーわりっ」

先輩が駆け回ってくれたおかげで掃除は予想より早く終わった。

「いやぁお疲れ様」

「ね！ね！テツ！約束のアレは？」

「ああ、アレだな？」

アレ？一体アレってなんだ？

「かき氷をけんちゃんと一緒につつく権利は？」

そつかあかき氷かっておい！何勝手に俺を巻き込んでんだよ！俺はそんなバカツプルみてえなことしないからな！

「あれ？練習で怪我した野球部の傷をつつく権利じゃなかったっけ？」

何その権利？かなり野球部の人権無視してるけど。てかすごいエグイな？どんだけSなんだよ！

「それでもいいけどまずはかき氷」

「ちっ！めんどいな」

うわ！教師が普通に舌打ちしたよ。

「かき氷」

「めんどい」

「かき氷」

「めんどい」

「かき氷」

「めんどい」

「・・・」

「・・・」

「・・・なんで俺を見るんですか」

「確かお前かき氷検定準一級だったよな？」

気になる！その検定かなり気になる！一体どんな試験内容なんだー！

「そうだよ！『シロップの道化師』って呼ばれたじゃん！」

呼ばれてません！そんな意味不明な肩書きはありません！てかシロップの方かよ！

「知ってるか？レモン味とメロン味を混ぜるとコーラ味になるんだぞ！」

「ホントに！？」

「嘘ぴょん！」

デジャブか？なんかこんなことこの前もあつたような。

「ぐすん・・・」

「ほらあ！永谷がかき氷を作ってくれないから泣いちゃったじゃんかよ！」

「え？俺のせい？」

「けんちゃんのが食べたいよ」

「どうするよ？先輩泣かせ？」

「・・・わかりましたよ。作ればいいんでしょ！作れば！」

「やったあ」

毎度ながら立ち直り早いな。

こうしてなぜか俺がかき氷を作らされるはめになった。

---

部室。

しやりしやりしやり・・・

氷が削れる音が部室に響く。てかこんなの誰がやったって一緒だろ！

「けんちゃんのかき氷」

「永谷早くしろよ」

たぐどいつもこいつも好きかって言いやがって。

しやりしやりしやり・・・

「できましたよ」

「わーいっただきまーす！」

ぱくっ！しやりしやりしやり・・・

「おいしーい！けど頭いつたあい！」

「頭が力チ割り氷だ〜！」

頭が力チ割り？それ確実に即死条件満たしてるって！

「はい、けんちゃん。あ〜ん」

「せ、先輩、何してんすか！／／」

「中川！先生にはないのか？」

「だっっておじさんだもん」

「お、おじ・・・さん」

テツはその場に突っ伏した。女の子の何気ない一言が男には大きいもんだよな。

「いいよ、いいよ。俺には美代子がいるさ。美代子はなんでもあ〜んしてくれるさ」

「・・・？」

先輩はテツの気持ちがわかってないみたいだな。

「ぐすつ。お前らどうせ一夏中イチャイチャしてんだろ！」

「うんっ」

「しませんからね？」

「嘘つけ！どうせ毎日デートだろ？」

先輩と毎日デートとか・・・幸せ・・・じゃなくて疲れそうだな。

「そんなこと計画してないもんっ／／」

「本当に？」

「本当だもん／／」

「本当は？」

「本当に・・・してないよっ／＼」

顔を真つ赤にしながら全否定する先輩。計画してたんですね？

「まあいいや。ここでお前らにニユースだ」

「ニユース？ミッションじゃないの？」

ミッションはもう勘弁だ。

「ニユースだ。明後日からお前らは合宿だあ！」

いらねえ企画すんじゃないよ！

「やったあ」

「し・か・も！俺は美代子と夏のウハウハデートがあるからお前ら二人きりだぜー！」

恐い！そのシュチュエーション超恐いよ！あ、でもちょっとだけいいかも！

「永谷？夜が楽しみだな？」

「テツ？そのうち性的な犯罪で捕まるよ？」

「そしたら逃げ出すさ。ははははは！」

こうして怒濤の夏休みは幕を切ったのだった！

「これは次回予告か？」

「違いますっ！」

episode 15 夏と先輩と先生と（後書き）

ちよつと山のない話になってしまいました（汗）この話を投稿した時点でアクセス数が4000を越えていました。ご愛読いただいている皆様に感謝です。

episode 16 お祭り部の合宿！？

夏の合宿。

一体何を想像するだろう？きつい練習。流れる汗。協力。ともに多くの時間を過ごすことでかけがえのない何かが入るはずだ。

しやりしやりしやり・・・。

「かき氷っ」

唯先輩は嬉しそうに苺ミルクのてっぺんをつついている。

今日は合宿。練習もなければ汗も流れない。いつも通りの部活だ。

「あ！頭痛い」

学習しろよ！かき氷を掻き込んで食べるからそうなるんだよ！

「ホントに今日泊まるんですか？」

「当たり前山東山」

意味不明だが先輩の決心は固いようだ。面倒なことにならなきゃいいんだけどな。

「けんちゃん！ちゃんとお泊りセットを持ってきた？」

「そんなセットは知りませんが泊まる用意はしてきました」

俺は自分の荷物の隣に置いてある先輩の荷物を見る。・・・妙に  
でかい。

「先輩、ずいぶんと大荷物ですね？」

「合宿だもんっ」

「あれ、何が入ってんですか？」

一応聞いておこう。

「あの中にはね。着替えと歯ブラシとタオルとお菓子とお菓子とお菓子とカメラと集音マイクと線香と鍵縄とダウジングマシンと世界地図とヒーロー変身セットとミニお祭りセットと義理と人情と愛と慈悲と夢と希望が入ってるんだっ」

うわー！ツツコミきれねえ！とりあえず最後のほうは目に見えない  
ものばっかじゃねえか！

「けんちゃんは何持ってきたの？」

「普通のものばっかですよ」

「パラシュートとか？」

やべーよ！それは普通の荷物じゃねえーよ。てか使用目的は何？

「よーし！早速、お祭り部始動だよっ！」

付き合ってらんないな。

ばしゃばしゃばしゃ・・・ぞばっ！

今回の合宿のテーマ。それはずばり夏を満喫することらしい。と言っても俺たちがいるのは学校のプール。学校なんかで夏が満喫できるのか？

「建人ゝ早く来いよゝ」

秀が俺を呼んでいる。あいつも合宿らしいが暇だから泳いでるらしい。

「久しぶりに出演だぜっ！」

うぜえ。余計なアピールしてんじゃねえよ！

「泳ぐのめんどくせーな」

「水が怖いのか？『白い黒鉛』！」

白い黒鉛って何色だー！お互い中和してんじゃねえかよ！

「わかったよ、今そつちに・・・」

「けんちゃゝん♪」

「建人君ゝ！」

「彩子！？」

なぜこの場に彩子が？

「大橋君に呼ばれて・・・」

コイツか。てかてめえは早く自分の部活に戻れや

「おお！彩子ちゃんの登場じゃないか！」

いちいちウザい奴だな。でもまあ間違つてないよな。健全な男子高生には彩子のスクール水着はちよつと刺激が強すぎるが

「けんちゃん！何彩子ちゃんのことじろじろ見てんのっ？」

「え？い、いや俺は・・・」

「建人君？／＼」

発育途中の女の子のあんなとこやこんなとこのラインが見えるんだ。男は見場所に困るもんなんだよ！

「うっ・・・僕には興味ないの？」

「き、興味なんて・・・」

『ありますっ！』という言葉俺は飲み込んだ。

「今日は私の勝ちですね♪先輩っ？」

「むむ・・・サイズなら勝ってるもん！こうなったら・・・」

おい、まさか・・・

「『ビート板をどれだけ高くできるでしょーか？』で勝負だっ！」

「臨むところっ！」

変な競技だー！達成感ないだろ？それに勝っても達成感がないだろ！

「何！？あのオリンピックピック公認競技。通称『ビー高』で勝負だと？」

国際競技！？この謎の争いが世界規模で行なわれるのか？ありえねえーよ！頭どうかしてるだろ！

「いざ！」

「勝負！」

こうして『ビー高』が始まった。美少女二人がものすごい勢いでビート板を積んでいく。かなり異様な光景だな。

「いいねー！はいパラッチ！」

誰かコイツを止める。

---

一時間後。

長えなおい！いつまでやってんだよ？・・・あ、野球部の球がこっちに・・・。

バシッ！

あ、唯先輩のに当たった。

「勝負あつた！」

いつのまにかレフェリーとなっていた秀の一言でようやく決着がついた。野球部に感謝だな。

「うわーん！反則だよっ！妨害だよー！」

「やったあ♪私の勝ち」

彩子はぴよんぴよん跳ねて大喜びだ。

「勝者の彩子ちゃんには『建人に甘える権利』が与えられます！」

待て待て！嬉しいけど待て！すんげー嬉しいけど待て！

「ちょっと待て！その賞品は俺の自我が持たないからやめろ！」

「うう・・・私のこと嫌いなんだ？」

「い、いや。これとそれは関係ないだろ」

「うわー！女泣かせだ！ここに女泣かせがいるぞー！」

うっぜえー！果てしなくうぜえ！

「わ、わかった！わかったから泣くな！」

「やったあ！」

切り替え早いな？

「僕にはないの？」

「唯先輩にはこの大橋 秀の愛を・・・」

「いんなーい！」

がつくり肩を落とす秀。ドンマイ、やっぱお前はサブキャラなんだよ。

「じゃあけんちゃんには僕に甘える権利をあ・げ・るっ」

意味わかんねえよ。

ぐうゝ．．．。

腹が減っては合宿はできぬ。俺が今いるのは校内の宿泊施設。まあ野球部とかサッカー部が合宿の時に使う場所だ。

「先輩ゝ。晩飯は何を作ってくれるんですか？」

「んゝ．．．『おつかレー』」

ようはカレーだな？まあ合宿の定番だよな。

「私も頑張って作るね！」

「あれ？彩子も泊まっていくなのか？」

「うんっゝなんだか楽しそうだから」

楽しいというよりも疲れると言ったほうが適切だな。

「おーい！俺の存在を忘れてないか？」

こいつも合宿か？てか写真報道部って合宿必要じゃないだろ！

「よし！作るよっ！」

「楽しみに待っててね！」

二人は台所に立ち料理を始めた。まあこの二人なら味に問題はないだろう。

「なあ？」

「ん？」

「お前ならどっちをお嫁さんにする？」

「お、お嫁！？」

「例えばの話だよ！」

「うーん・・・」

うーん・・・彩子はいいい子だけど唯先輩の元気いっばいでもいいよなあ。でもたまにウザいんだよ・・・彩子の純情なことかグツとくるよなあ。でも唯先輩の年上の魅力もなかなかだしでも幼なじみとの生活つてのも・・・。

「おい！」

「ぶつぶつぶつぶつ・・・」

「おいっ！」

「あ？ああ、わりい」

「お前考えすぎだよ」

確かに考えすぎかもしれない。勝手に盛り上がってんのも悲しいかな。

「んで、お前はどっちにすんだよ？」

「アフリカあたりの国に連れてって一夫多妻制で二人とも俺のもの

にするな」

それあり？その手段はありなのか？人間として反則じゃないのか？

三十分後

「完成したよー！」

「食べて食べて！」

おいしそうな匂いをただよせたカレーが目の前に置かれる。

「けんちゃん、あくんは？」

「結構です！」

俺は自力でカレーを口に運ぶ。

「・・・うん！うまい！」

「ホントに？」

「やったあ！」

唯先輩と彩子は手を取り合って大喜びだ。仲いいんだか悪いんだか・・・。

「なあ？これ食い終わったら肝試ししないか？」

『肝試し！？』

俺は驚きの声を二人は嬉しそうな声をあげた。

「夜の学校って楽しそうじゃなか？」

「僕、賛成〜！」

「私も〜！建人君も行くよね？」

「いや俺は・・・」

『行くよね？』

「・・・行きます」

二人の目から行かないと大変なことが起こりそうなオーラを感じた。  
行けばいいんだろ？行けば！

「ご飯食べたら出発〜！」

こうして俺たちは夜の学校へと潜入することとなった。

夜の学校。

カッーン。カッーン。

四人の足音が誰もいない廊下に響く。

「なんか雰囲気あるな？」

「そそそそんなことないよ！ね、彩子ちゃん？」

「そそそそうですよ。こ、怖くないですよ」

わかりやすい反応だな？怖いなら怖いって言えばいいのに。

「ふん。こんなの俺が浮気をしたことを知った元カノと比べれば・  
・・・」

何があつた？元カノと何があつたんだよ！元カノがそんなに怖いのか？

「キャッ！」

「どうした？彩子？」

「今、変な白い影が・・・」

ベタな展開だが白い影が見えたらしい。たぶんベタにカーテンか何かだろう。

「よし！ここにある『ナンデモスケール』を使って見てみよう。」

秀は紫色の変な形をした眼鏡を取り出した。

「ナンデモスケール？」

「白衣着た先輩がくれたんだ。その名の通りある程度の厚さの物体なら透けて見えるんだ！」

うん。それは犯罪だよ？確実に罪だよ？

ヴィイン。

秀は『ナンデモスケール』を使って彩子の指差す方を見た。

「どうだ？なんか見えるか？」

「水色と黒の楕円形でとげとげのゼリー状の物体が激しく上下に悶えてる・・・」

お前には何が見えてるんだ？てかそれは地球上に存在するものなの

か？

「幽霊はいないみたいだな」

「よかったあ。彩子ちゃんったら驚かさないですよ」

「だつてえ」

「はは。二人とも怖がりだなあ・・・」

（へ～タ～レ～・・・）

「ん？うるせえよ秀」

「は？俺何も言つてないけど」

「彩子？唯先輩？」

二人とも首を横に振る。

（へ～タ～レ～・・・）

「な、なあ？声聞こえたよな？」

「は、はは。気のせいじゃない？」

「で、でもヘタレって・・・」

四人は恐る恐る後ろを向いた。

そこには白衣を着てふわふわ浮いているいり人の姿がつて説明している場合じゃねええ！

「お化けだあああ！」

「きゃあああ！」

「いやあああ！」

「脱サラあああ！」

わけわかんねえ！脱サラって今叫ぶのにまったく適してねえよ！つてツッコミ入れてる場合じゃねえな。今は・・・

『逃げろおおおおお！』

俺たちはその場から一目散に逃げ出した。

(・・・・・・・・)

カッン。カッン。

「新発明『スーパードバーチャル』の完成は近いですね。くくくくく・・・」

白衣を着たオシャレ眼鏡は細く微笑んだ。

俺らはそのあと夜の学校がトラウマになったのは言うまでもない。

こうしてカタカタ震える先輩をなだめながら合宿の夜は明けていきましたとき。

episode 17 女子高生型ロボットと先輩

ヴィイイイン・・・

「ついに・・・完成した！」

夏つてのは楽しいが暑いのが最大の難点だ。だから昼間はクーラーのかかった部屋でごろごろするのが一番なのだが・・・。

「暑いー！」

先輩は太陽の照りつけるアスファルトの上で駄々をこねはじめた。俺たちは今炎天下の中にいる。

「暑いよぉ〜」

「我慢してください！てか先輩が俺のこと呼んだんでしょが！」

炎天下の中、なぜ歩いているのか？それは先輩が俺のことを呼び出したからだ。

「それで？今日は俺をどこに連れていこうって言うんですか？」

「博士のところ」

「・・・今なんて言いました？」  
「は・か・せ！」

おい！マジかよ？あの犯罪者の巣窟に突入ってか？危ねえよ！生きては帰れねえよ！

「ギャルえもんが完成したんだってー！」

「え！あの犯罪の匂いがぶんぶんするロボットが完成しちゃったんですか？」

「うん♪完成しちゃったよ」

マズイ。あれが完成するのはマズイ。確実に獄中行きになっちまうよ！

「それで博士が見せてくれるっていうからけんちゃんも一緒にどうかなって思ってた」

「・・・そ、そうですか」

「迷惑・・・だった？」

唯先輩は淋しそうな目で俺の顔を覗き込んできた。やめろ！その小動物のような目はやめろ！

「そ、そんなことないですよ」

「そっか！よかった♪」

先輩はルンルンしながら俺の先を歩く。かなりいい迷惑だが俺も少しそのロボットに興味があるな。

「ここを曲がれば・・・博士ん家！」

角を曲がると明らかに他の家から浮いている家が目に入った。アンテナが無数に立ち、窓はない。屋根からはなぜか煙突が生えている。まさしく研究所だな。

「ここが犯罪の根源……」

「ん？何か言った？」

「いえ、なんにも……」

「さあ！いこつ！」

先輩は博士の研究所（？）へと足を踏み入れた。俺も恐る恐る近づく。

ピンポン

ガチャ

「やあ中川氏。待ってましたよ。おや？永谷氏も一緒に」

「ど、どうも」

「ねっ？ギャルえもん早く見せてよ！」

「わかりました。ではこれで目隠しをしてください」

「目隠し？何ですか？」

「少々社会に表沙汰になると厄介なものがありまして」

何があるんだ？この家の中には何があるんだ？一体何を作ったんだあー！

唯先輩はルンルンで俺は本気でビビリながら博士先輩への家へと入った。

「さあこちらです」

博士先輩に手を引かれ一つの部屋に入れられた。

「もう目隠しを取って結構です」

俺は邪魔な目隠しを取った。視界に入ってきた部屋にはわけのわからない部品や鉄の固まりが転がり、部屋の端にはたくさんのケーブルにつながれたパソコンが置いてある。そしてそのケーブルの先にアレはいた。

「うわぁ！」

「これが完成したギャルえもんです」

ケーブルの先につながれているアレ。それはまさしくギャルだ。ケバ化粧、ゆるゆるのルーズソックス、パーマをかけたような金髪、いかにもちゃらちゃらしていそうな風貌。

「博士先輩！人身売買は犯罪ですよ！」

「失礼な。あれは僕が発明した女子高生型ロボット　ギャルえもんです」

作りやがった！コイツマジで作りやがったよ！

「今は充電中ですので動きませんが間もなく……」

『ギャルえもんのメインバッテリーの充電が終わりました』

パソコンから機械的な音声が聞こえた。充電……終わっちゃったのか？

『ギャルえもんver.1.54』起動します』

ヴィイイイン

「ふわあゝマジよく寝たゝ」

ギャルえもんが喋った。しかもかなり自然な感じで。

「ん？あれお客さんですか？マスター？」

ロボットもといギャルえもんが俺たちに気付く。

「うわー！喋った！喋った！」

「そつちの子はどちらさん？」

「僕は中川 唯だよ！」

「中川唯？ああ！中川氏のこと？」

「そうだよ！」

あわわ！ロボットと先輩が普通に自己紹介してるよ！

「ん？そつちの人は？」

「ども、永谷建人っす」

「永谷建人？ああ！ヘタレ！」

「博士先輩？何をプログラムしたんですか！」

「ありのままに」

うつ・・・ロボットにまでヘタレ扱いされるなんて

「てゆうーか、中川氏って超モテなんでしょー？」

「ええー？モテないよ！」

「だってキャンケラブがあるんでしょ？」

たぶんファンクラブの間違いだろう。まだ未完な部分もあるんだな。

「しかしよくできてますね？」

「はい。制作に二年もかけましたからね。限りなく人間に近付けるのには苦労しました」

まあ作ってるものに問題があるがこの人は確実に天才だ。

「たとえば胸の感触なんかは失敗の繰り返しでしたからね」

やつばあんたはただの犯罪者だな。

「でもお。こんなヘタレといえるのって超イミフなんだけどお」

「そんなことないよ！」

「マジでえ？全然イケてないじゃん？」

「そんなことないもん！」

「そんなにムキになんないでよお！ホントにヘタレなんだからあ！」

「うー！けんちゃんの悪口言つなあ！」

バコッ！

唯先輩がギャルえもんを叩いた。たまにはいいことしてくれるな。

「中川氏！ギャルえもんに衝撃を与えては！」

『危険を感知しました。自己防衛システムが起動します』

自己防衛システム？なんだそれ？

「まずい！二人とも伏せてください！」

博士先輩が叫んだ次の瞬間ギャルえもんのお腹から何か棒状の鉄のかたまりがでてきた。そして・・・

ばばばばばはっ！

なんか撃ってるよー！殺される！ギャルに殺される！

「ギャルえもんは危険を感じると8mmガトリング砲を撃つんです」

うわー！何？そのいらない機能？そっちのほうがよっぽど危険だつての！

「くっ・・・唯先輩、大丈夫ですか？」

「あはは！すごいすごい」

いろんな意味で大丈夫みたいですね

「博士先輩！このままじゃあ誰か死にますよ！」

「こうなったら強制終了ボタンしかないですね」

博士先輩はリモコンみたいなもののボタンを押した。

『ギャルえもんを強制終了します』

ヴウウウン……。

発砲は止まってギャルえもんはおとなくしなった。

『再起動まであと三十秒』

「ふう。これで一安心です」

「すごかったね？ばばって」

「つたく！先輩が原因なんですよ？」

「だってけんちゃんのことバカにするから……」

「な、なんで先輩がそこで怒るんですか！」

「なんでって……なんでもだよっ／＼」

『ギャルえもん、再起動』

「あれ？私ったら何してたの？」

ギャルえもんが再起動したみたいだ。どうやらさっきしたことを覚えてないらしい。

「さっきまで自己防衛システムが働いていたんだ」

「そっかあ。ミサイルは撃たなかったみたいだね？」

ミサイル？あんたの体の中にはミサイルまで入ってるのか？

「あとちよつとで毒ガス散布モードに入るところでしたが」

怖えよ！もうギャルじゃなくてただの殺人マシンじゃねえかよ！

「ねえねえ博士？」

「なんですか？中川氏？」

「パソコンの画面に映ってる写真、アレって僕だよね？」

「写真？」

俺もパソコンの画面を覗いてみる。……確かに唯先輩の写真がたくさん映っている。

「ああ。それはあとでアルバムにして中川氏にプレゼントしようかと」

「やったあ」

俺はもう一度画面を見る。……ん？なんか端っこに書いてあるな。

『中川FCとの売買契約済み』

……見なかったことにしよう。そしてあとで警察に通報しよう。俺は自分にそう言い聞かせた。

「てゆーか。マジで男って意味不明だよねえ」

「ん？なんで？」

「変なところ触って喜んだり、夜になると急に性格変わったり」

「博士、ギャルえもんに何してんの？」

「スキンシップです」

なんかやばくないか？そのスキンシップはかなり危険なんじゃないのか？

「中川氏。向こうで必勝ナンパの誘われ方観ない？」  
「観る観る！」

唯先輩とギャルえもんは向こうで怪しげなDVDを見始めた。

「ふむ。人間との交流に問題点はないですね」

「あの、博士先輩？」

「なんででしょうか？」

「なんでギャルえもんを作ったんですか？」

「商売ですよ。商売」

「商売？」

「はい。あれを世界中に男たちの心の支えとして売ります！我ながらなんて素晴らしいビジネスなんだ！」

やばい！この人へんなビジネス立ち上げようとしてるよ！

「今後もし非僕の発明品の実験に付き合ってくださいね？」

博士先輩は不気味な笑みを浮かべながら俺の肩をぽんと叩いた。

たぶんこれからも変なもの作るんだろうな。パソコンをイジリながらニヤつく博士先輩を見て俺は一つため息をついた。

## episode 17 女子高生型ロボットと先輩（後書き）

この話を投稿した時点で読者数が5000人を越えました。読者の皆様に感謝です。

episode 18 先輩とダイエット！

「むむむ・・・」

さつきから唯先輩は体重計と睨めっこをしている。

「かき氷できましたよ」

「むゝ。・・・ダメだあ」

大好きなはずのかき氷にも反応がない。練乳をたくさんかけてあげたのに

「もうさつきからどうしたんですか？」

「こつち来ちゃダメ！」

すごい剣幕で近づこうとした俺を制止する先輩。なんだっていうんだか。

「増えた・・・」

「何がですか？」

「体重だよ！普通に考えればわかるでしょ！」

めずらしくご機嫌斜めだな。

「うう1キロも太っちゃったよお」

「たかが1キロくらいで・・・」

「ん！1キロでも乙女には重大なの！」

「はあ・・・」

「うゝ。どうしよう・・・」

「成長したんじゃないんですか？」

「身長は大きくなってないもん」

ようは先輩は太っちゃったってわけだな。

「こうなったら！」

なんかまた始めるつもりみたいだ。まあ俺はかき氷を食べて家に帰ろうかな。

「こうなったら！」

ぱくっ。しゃりしゃりしゃり

「こうなったら！」

ぱくっ。しゃりしゃりしゃり

「こうな・・・ぐすん」

「あーわかりましたよ！こうなったら何をするんですか？」

「こうなったらダイエツト大作戦だよ！」

「ダイエツト・・・大作戦？」

「うん！痩せるぞ」

「そうですか。頑張ってくださいね」

ぱくっ。しゃりしゃりしゃり

夏はやっぱかき氷だな。

「けんちゃんも付き合ってくれるよね！」

「ええ？俺もですか」

「ねっ？けんちゃん」

唯先輩は俺の腕に抱きついてきた。

ほわああああ！久しぶりに自我崩壊しそうう！先輩が俺の、俺の腕にいい抱きついてるう！ああ誰かこの人引き離してえ！むしろいつそのままにしてええ！

「あはっ♪けんちゃん付き合ってくれるんだね！」

「はあはあ。は、はい・・・」

なんだかどつと疲れた。

「よし！ダイエット大作戦開始っ♪」

ダイエットってのはジョギングかなにか運動をするものかと思っ  
ていたんだが・・・

「先輩走らないんですか？」

「うんっ」

今俺たちは普通に歩いている。ウォーキングってのも立派な運動だがすぐに効果がでるもんじゃないだろ。

「それでどこまで歩くんですか？」

「うん・・・天竺・・・かな？」

うわぁ。まさかの昔話の登場だよ！しかも何？そのなんとなく決めた感じ？生半可な気持ちじゃ天竺に辿り着かないよ？

「うそだよ。今から恭子ん家に行くんだよ！」

「恭子先輩ん家？」

「うんっ ♪」

恭子先輩とダイエット。うゝん関連性がない気がするんだが。

「もうそろそろ見えてくるはずなんだけどなあ・・・あ！見えた」  
「・・・見えたってあれですか？」

俺は先輩が指を指した方向を見た。

「あれってヴェルサイユ宮殿って言っんですよね？」

「違うよ、恭子ん家って言っんだよ」

いや、これは家とは呼ばないだろう。だって居住していると思われる建物が遠近法で親指くらいにしか見えないほど庭が広いのだから。

「確かねこのボタンを押せば・・・」

唯先輩は門らしきものに付いているインターホンを押した。

『どちら様でしょうか？』

ダンディーなおじさんの声が聞こえる。

「僕だよ。僕！恭子に会いに来たの」

『おお。恭子様のお友達でいらっしやいますか。ただいまそちらに車を手配致します』

「うん、ありがとう!」

『当然のことでございます。では後程』

「誰っすか?今のダンディーボイスは?」

「真壁財閥に仕える羊さんだよ!」

HAHAHA!この世のどこに羊を雇うイカレタ野郎がいるんだい?

「えっと・・・執事ですね?」

「えへへっ」

唯先輩は舌をぺろつと出して恥ずかしそうに笑った。

可愛いけどあんたは筋金入りのバカなんですね。

ブロロロロ・・・

「あ!来た来た!」

向こうから例の黒塗りのベンツがやってきた。そしてそれは俺たちの目の前に止まった。

ウィーン。運転席の窓が開く。

「遅れて申し訳ございません。執事の羊山でございます。めえ」

うわ!マジで羊だ!しかも今最後にめえっって鳴かなかったか?

「羊さん。お久しぶりい!」

「中川様、お久しぶりでございます。ちなみに私は羊ではなく羊山でございますのでお見知りおきを。ん？後ろにいらっしやる御方は？」

羊・・・じゃなくて羊山さんが俺に気付く。

「あ、どうも永谷建人です」

「恭子様のお友達でございますか？それとも恋人でございますか？」

「恋人なんてとんでもない！ただの後輩です！」

「左様でございますか。もし恋人でしたらこのショットガンで身を改める必要がありましたので」

怖ええ！この人凶器持って笑ってるよ！てか迂闊に恭子先輩に手出したら殺されるよ！

「でたー！羊さんのイタリアンジョーク！」

「いえ。これはスパニッシュジョークでございます」

わかんねえ！国の違いがどこでわかるのかがわかんねえ！

「それではお二人とも車にお乗りください。恭子様のお部屋にお連れします」

俺たちは黒塗りのベンツに乗り込んだ。

何平方メートルあるのかわからない程広い庭にはたくさんの植木が規則的にならんでいる。真ん中にはよくわからない銅像と大きな噴水がある。

「す、すごいですね」

「真壁財閥だからねっ！」

さすがは財閥と言ったところか学校の校庭並の広さの庭はまさしく豪邸と呼ぶにふさわしい風格だ。

ブロロ・・・。

「さあ着きましたよ」

「ありがと羊さん！」

「玄関もやっぱりセレブっすね」

車を降りた俺たちの目の前に無駄にでかい玄関が現われる。なんだからいろんな飾りがくつついてるな。

「さあ中へ」

羊山さんのあとに付いて真壁邸へと入る。外見通り中は広々としていて、天井にはたくさんさんの照明がぶらさがっている。

「なんだかちよつとしたら城ですね？」

「僕もこんな要塞に住みたいなあ」

要塞ってそんな物騒な雰囲気じゃないだろ。

「おお！今のはロシアンジョークですな？」

「正解！さすがは『多国籍芸人』の異名をもつ羊さん！」

わからん！さっぱり感性がわからん！てか多国籍芸人ってなんだよ？

「さあ二階にどうぞ」

気を取り直して階段を上って恭子先輩の部屋に向かうことにしよう。  
俺たちは異様に長い螺旋階段を上った。

「さあこちらへ」

階段を上り終えると今度はメチャクチャ長い廊下が見える。等間隔にドアが無数にありその間には見たことのないような絵画が飾られている。

「すごい量の絵ですね」

「はい。旦那様は油絵などを集めることが趣味のひとつでございます」

「へえ」。あの真つ赤な花畑の中にゴロゴロ頭蓋骨が転がってる絵はなんですか？」

「あれは旦那様のお気に入りの絵で伝説の画家オデン・ハ・ガーンモンの『惨劇のお花畑』でございます」

惨劇のお花畑！？なんだかそんなあだ名を持っていたような気がする。

「さあここから24番目の部屋が恭子様の部屋でございます」

24ってどんだけ部屋があるんだよ！

俺たちは長い廊下を歩いてやっとの思いで24番目の部屋に辿り着いた。

コンコン。

「恭子様。お友達がお目見えです」  
「どうぞ」

ガチャ。

・・・扉の向こうはセレブの世界でした。  
もしこの部屋にキャッチコピーを付けるとしたらこんな感じだろう。  
ともかくありとあらゆるものが輝いて見える。

「あら。唯ちゃんに建人さん。わざわざどうなさったんですか？」  
「うん。え〜っと・・・前置きが長すぎて忘れちゃった！」  
「ダイエツト大作戦でしょーが！」  
「そうだった！」

ふう。若干俺も忘れかけてたな。

「ダイエツト大作戦ですか？」  
「そうなんだよ〜！1キロも太っちゃたの〜！」  
「ふふ。唯ちゃんは痩せていますから大丈夫ですよ」

恭子先輩は天使のほほ笑みで唯先輩を慰めた。やっぱりこの人は癒されるな。

「おお！恭子様の笑顔は実にすばらしい！」

このおっさんは大丈夫か？

「でも、やっぱり気になるよ！お願い恭子。フトンとブス貸して！」  
「・・・？フィットネスマシンのことですか？」  
「そう！それ！」

布団とブスじゃ1グラムも痩せないだろうな。てか間違え過ぎ。

「いいですよ。どうぞ自由に使ってください」

「わーい」恭子ありがとー」

「どういたしまして。羊山さん、準備のほうよろしくね」

「かしこまりました恭子様」

再び羊山さんのあとに付いていく。どうやらエレベータに乗って地下に行くらしい。

「地下にあるんですか？」

「はい。お父さまが運動が好きなんです。こう見えて私もアウトドア派なんですよ？」

「へえ。そうだったんですか。恭子先輩って部屋で読書してるイメージだったんですけどね」

「そんなことないですよ。読書も好きですけどね」

恭子先輩は楽しそうに笑った。ホントにいい先輩だ。

「さあ間もなく着きますよ」

チン！

エレベータのドアが開いた。目の前にちょっとしたスポーツクラブのような光景が広がる。

「基本的にはなんでも揃っていると思います」

「よーし。痩せるぞー！」

唯先輩は一目散に並べられたマシンに駆け付けた。体育館のような広いスペースに並べられた無数の器具。通販とかでみたことのあるようなものから使い方の見当すらつかないものまで

多種多様だ。

「しかしすごい量のマシンですね？」

「全部で1000種類以上の器具を取り揃えております」

「1000種類！？」

「もう。羊山さんったらフレンチジョークがお上手なんですから」

「お褒め頂き光栄です」

恭子先輩まで！？てかどこらへんがフランスなんですかー！

俺は恭子先輩の変な一面を知った気がした。

「うわーん！けんちゃん！助けてよー！」

無数の器具の向こうから唯先輩の声が聞こえる。

「ど、どうしたんですか！」

「これ重すぎー！」

唯先輩は変な棒を必死に持っている。

「けんちゃん、持って！」

「仕方ないですね・・・って俺が持つちゃ意味がないじゃないですか！」

「だって重いんだもん」

「ふふふ。それは自分でやらなきゃダメですよ唯ちゃん？」

「うゝ。はい」

唯先輩は再び謎の棒を一生懸命持ち上げはじめた。

「私も負けてられませんね。少し汗をかいてきます」

恭子先輩も運動を始めた。別に運動しなくてもスタイル抜群なのに。

「女の子ってダイエット好きなんです。俺にはちょっとわからないけど」

「男にはわからない乙女心ですよ」

「はあ」

羊山さんは満足そうに微笑した。俺は目の前でダイエット中の先輩たちを見守ることにしよう。

数時間後。

「心の準備はよろしいでしょうか？」

「うん！羊さんいつでもいいよ」

「頑張つてね唯ちゃん！」

広いホールの真ん中で唯先輩は体重計と対峙している。そしてそれを見守る俺たち。なんだこの光景？

「・・・乗りますっ！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・！痩せてる！2キロも痩せてるよー！」

「おお！やりましたな中川様！」

「唯ちゃんすごいです!」

「よかったですね先輩!」

「うんっ!みんなありがとー」

こうして唯先輩のダイエット大作戦は見事に成功したのでした。

翌日。

♪♪♪♪♪

朝から俺の携帯電話が鳴り響く。

「誰だろ?」

ピッ

「うわーん!けんちゃん!」

「ゆ、唯先輩!?!どうしたんですか!」

「今朝計ったら僕の胸が1センチ減ってるんだよー!」

「胸!?!」

「うゝ。こうなったら『バストアップ大作戦』だよっ!じゃ、学校で待ってるねゝ!」

ブチッ!ツーツー

「・・・マジで?」

結局この作戦で元の胸を取り戻したものの体重が1キロ増えて誤差が

なくなってしまうことをまだ俺は知らないのであつた。

episode 19 No.2の反逆！妹を奪還せよ！

女の子っていうのは男を振り回すもんだ。俺は最近よくそう思う。

なんでそう思うかって？それは今朝俺に届いた唯先輩からのメールが原因だ。

『彩子ちゃんと一緒に水着を買いに行くからけんちゃんも至急来て！来ないと彩子ちゃんとあんなことやこんなことしちゃうぞ♪』

おかしいな。あの二人は臨戦態勢のはずだったんだが・・・まあ変なことされるのも勘弁だし付き合ってやるか。

というわけで現在陽光商店街を歩行中。待ち合わせ場所は入り口近くの広場だ。

「水着かぁ・・・」

俺は勝手に二人の水着姿を想像してみた。

二人とも絶対可愛い系を選ぶだろうな。いや、意外に大胆なセクシィ系かも。スタイルいいからメチャクチャ似合いそうだな。んーでも個人的にはピンクとか白系の純粋な感じの水着が・・・

「よう、永谷。にやつきながら歩いてどうした？」

ふと太い声が俺を妄想から我に返す。

「・・・！？鬼嶋先輩！」

太い声の主は清光の番長の鬼嶋先輩だった。どうやら今日は一人みただな。

「先輩？どうしたんですか？こんなとこ一人で歩いて」

「ああ。今日は月刊『不良魂』を買いにな」

先輩はおそらく『不良魂』が入っていると思われる袋を俺に見せた。てかさんなわけわかんない雑誌が月単位で発行されているのか？

「そういう永谷は何してんだ？」

「ちよつと唯先輩の買い物に付き合うことに」

「なああにい！？唯さんと付き合うだとお！」

はしより過ぎだー！買い物の部分が聞こえてなかったのか！？  
鬼嶋先輩は俺の襟を掴み今にも殴ってきそうだ。

「買い物です！買い物！」

「買い物？・・・そうか。早くそういうことは言えよ」

言ってんじゃん！

「よ、よかったら先輩も一緒にどうですか？きっと唯先輩も喜びますよ」

とりあえず先輩の機嫌をとらなければ

「む・・・いいのか？」

「はい・・・たぶん・・・」

「よし、じゃあ俺も唯さんの買い物に付き合つか」

え？マジで？

こうしてまさかの鬼嶋先輩の同伴が決まってしまった。

俺の隣を上機嫌に歩く鬼嶋先輩。かなりへんな画になってるな。

「そこの角を曲がったとこに待ってるはずですよ」

俺たちは唯先輩との待ち合わせ場所の角を曲がった。

どすっ！

誰かと肩が当たった。

「あ、すいません」

「ああ？」

やばい。反応的にこの人は怖い人だ！俺は恐る恐る顔をあげた。

「あ！てめえは鬼神の永谷！それに鬼嶋まで！」

「あー！須藤！」

俺が肩をぶつけた相手は不良校こと獄怨高校の番長、須藤だったのだ！

「おい。てめえこんなとこで何してんだよ？ああ？」

鬼嶋先輩はすでに喧嘩腰だ。こんなとこで騒動起こしたら警察が来るからやめろよ！

「あ？ああ・・・ちよつとな」

ん？いつもの勢いが無いな。どうかしたのか？

「・・・おい！なに拍子抜けな態度してんだよ！」

「く・・・鬼嶋あ！永谷あ！」

ごくり。すごい形相だ。

「頼みごとがある！」

どてっ！思わずベタなりアクションを取ってしまった。なんだよ！喧嘩じゃないのか？

「頼みごと？」

「頼みごとだとお？」

「ああ・・・実は・・・俺の妹がつ！」

妹？ああ！あのポニーテール少女か。

須藤の話によるとその妹が獄怨のNo.2こと神崎に人質として拉致されたらしい。それで妹の救出を手伝ってほしいらしい。短絡的だなNo.2。

「頼む！妹のこととなると俺は冷静を保てなくなっちまうんだ！」

須藤は俺たちに深々と頭を下げた。なんだかお気の毒だな。

「どうするんですか先輩？」

「断る。俺は今から唯さんとデートだ」

うわぁ！この人に義理も人情もないよ！てか勝手にデートになってるし！

「な！・・・その唯とかいう女も神崎は狙ってるらしいぞ」  
「ぬわぁぁにいいい！？」

先輩は急に鬼の形相になった。てかりアクションでかいな。

「そいつはどこにいる？血祭りにしてくれるわぁ！」

「そうか！手伝ってくれるのか！」

「唯さんは俺が守る！」

「妹は俺が守る！」

会話が成り立ってねー！お互い自分のことしか考えてねえよ！

「よしっ！じゃあ永谷も行くぞ！」

「・・・え？なにか言いましたか？」

「永谷も行くんだよ。後輩なんだからな」

え？マジすか？

こうして須藤の妹奪還計画がはじまった。てか俺も強制参加？

「そ、それで神崎たちはどこにいるんですか？」

「たぶんここだ」

須藤は俺に四つ折りになった紙を渡した。どうやら手紙のようだ。

なになに・・・

『果たし状』

なるほど。神崎からの果たし状ってわけか。俺はそのまま目を下にやる。

拝啓 須藤有希様

だんだんと暑さが厳しくなる中いかがお過ごしでしょうか。

さてこの度は貴方の妹である須藤まどか様を拉致及び監禁させていただくことになりました。

異議がある場合や返還を要求される場合は私立獄怨高等学校付近の廃工場までお越しください。

神崎誠 敬具

めっちゃめっちゃ行儀いいなおい！てか行儀よく物騒なこと書いてんじやねーよ！

「ふむ。廃工場か」

冷静だなおい。

「あそこは誰も近づかないからな」

「これって罠じゃないんすか？」

『・・・！』

二人して今気付いたリアクションしてんじやねーよ！普通に考えれ

ばわかるだろうが！

「真っ向勝負じゃ向こうの思う壺じゃないんですか？」

「ん・・・知るかそんなもん！」

「男なら真っ向勝負だ！」

ヤンキー二人は我が道をゆくらしい。ほんとに大丈夫なのかよ！

「ここ・・・ですか？」

目の前にはボロボロの廃工場。窓は割られ、塗装も剥がれてしまっている。入り口らしきドアは錆付いていても人の気配を感じられない。

「ここに俺の妹が・・・！」

「ここに唯さんを狙う輩が・・・！」

「・・・先が思いやられるな」

「よしっ！いくぞっ！」

「おうっ！」

俺たちは神崎たちが待っている廃工場へと足を踏み入れた。

中は夏なのにひんやりとしていて不気味だ。ところどころにはほこりを被った何かの台が置いてある。そして真ん中にはたくさんの人影。

「神崎っ！」

30人あまりいるだろうヤンキーの群れの中に神崎はいた。

「よう須藤。お友達も一緒に一緒か」

「妹を返せっ！」

「安心しろ。お前の妹はここだ！」

ヤンキーの群れの向こう側に椅子に縛り付けられた須藤の妹がいた。  
コラコラ女の子は大切にしなきゃダメだぞ。

「まどかつ！」

「お・・・お兄ちゃん？」

「まどか！お兄ちゃんが助けにきたからもう大丈夫だぞ」

自分でお兄ちゃんって言うな！てかキャラに合ってねえよ！

「お兄ちゃんなんで来たのよ！」

「なんでって・・・お兄ちゃんはまどかが心配でっ！」

「もう！恥ずかしいから帰って！」

あいかわらずツンツンしてんなあ。てか須藤ってシスコンなんのか？

「くっ！誘拐のショックで俺のまどかの性格が！」

バカがいるよー！

「許さないぞお！神崎い！」

「唯さんは俺のものだあ！」

「二人とも冷静につ！」

三人は戦闘態勢に入った。・・・って俺も！？

「ふふふ・・・果たして3対30で俺たちに勝てるかな？」

「うるせえ！」

「やってやる！」

「マジで！？？」

3人（1人除く）はヤンキーの群れへと突っ込んでいった。

ばきっ！ぼかつ！どすっ！びしっ！ばんっ！どきや！どかつ！きやうん！結婚しよう！ええ！どーん！ぐはっ！べきよ！

誰か今プロポーズしたー！しかも承諾してる！

いまのところはとりあえず互角と言ったところか鬼嶋・須藤という強力ペアだから成せることだ。これが常人なら1分でダウンだ。

「ツイストスネークラッシュ！」

「ぐはあ！」

鬼嶋先輩の両腕が蛇のようにしなりながらヤンキーたちをなぎはらう。軽く3人は逝ったな。

「夢幻太刀婆袈羅あ！」

「うわあ！」

これまたどこに隠し持っていたのかわからない木刀を激しく振り回す。4人は逝ったな。

「よし・・・！俺は今のうちに・・・」

俺は乱闘を横目に捕われた須藤の妹を解放しにむかった。

「おい！大丈夫か？」

「あ！あんたは清光の永谷！」

「よう。今助けてやるからな。じっとしてろよ」

俺は縛られた手首と足首を解放してやる。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。さあ安全なところへ」

俺は須藤の妹を安全な場所に避難させようとした。そのときだった。

「神崎っ！貴様もここまでだ！」

「くっ！役たたずめ！」

どうやら神崎の配下を全員倒したようだ。先輩の周りにはヤンキーがたくさん倒れている。

「おとなしく観念しろ！獄怨のNo.1は永遠に俺だ！」

「ふ・・・はは・・・ふははははっ！」

「何がおかしい？」

「残念だったなあ。こっちは秘密兵器があるんだよ！」

「秘密兵器だっ！？」

神崎はにやりと笑って謎の赤い液体を取出し一気に飲み干した。

「な、なんだその液体は!?!」

「ふははっ!力が、力が漲ってくるぞお!」

突然、神崎の体から赤いオーラが発生する。と同時に胸筋で上着を破った・・・ってどんだけマッチョなんだよ!

「これはな『マッチョメディスン』といって人間の筋力を限界まで発揮できる薬だっ!これを飲めばデコピンで鳩を殺せるんだぞ!」

デコピン強ええ!まさかの鳩を撃破可能かよ!てかどんだけの破壊力なんだよ!

「くらえっ!ツイストスネークラッシュ!」

「無駄!」

「鬼嶋先輩の攻撃が防がれた!?!」

「くそっ!なぜだ!」

「うおゝ!夢幻太刀婆袈羅あ!」

「ふん!」

「ああ!須藤の攻撃まで!」

神崎は二人の攻撃を見事に防いで動じない。あの二人より強いのか!?!

「今度はこっちの番だあ!必殺!初キスは干し梅の味い!」

『ぐはあ!』

鬼嶋先輩と須藤が宙を舞う。つ、強い!そしてその味はいただけな

い！

「くそ！このままじゃ」

「何言ってるの？あんたがいるじゃない！」

「え？俺！？」

「そうよ！あんたは鬼神なんでしょ？」

「いや、それは・・・」

「ふふふ。知ってるわよ。あなたが強くなる条件・・・それはこれよ！」

何を思ったか須藤の妹はスカートの裾を持つとそのまま持ち上げた。

おお！パンツ丸見え！しかも柄パン！いけませんぞ！そんなもの履いてはいけませんぞお！

「・・・」

「・・・ど、どう？」

「・・・特に」

「・・・え？」

まったく体が熱くならない。どうやら失敗だ。

「な、なんでっ！？中学生じゃダメなのっ？」

「・・・さあ？」

残念ながらお子ちゃまパンツじゃ自我崩壊しないのさ！ってそんな場合じゃねえ！このままじゃやられる！

「鬼嶋先輩！須藤！起きてください！」

「うつ・・・」

さっきまで倒れていた須藤が起き上がる。

「はっ！俺のまどかは！」

「ここにちゃんといますよ！」

「むっ！・・・！！」

こちらを向いた須藤の目が大きく見開く。

「ぱ、パンツだぁ！うおおお！まどかの縞パンが見えたぁ！青春の地平線があ！見えたぁ！」

須藤からものすごいオーラが発せられる。まさか！

「うおおお！双頭撃滅婆娑羅あ！」

チュドーン！

爆発した？てかなんだ今の技は！？

爆発の衝撃で工場内にいろんなものが飛び散る。あれ？なんだか写真が飛び散ってるな。俺は一枚手に取る。写っていたものは・・・

「ゆ、唯先輩！？」

写真には唯先輩が写っている。しかも裏面に小さく『売り主・葉加瀬』って書いてあるじゃねえか！

「はっ！こ、これは！」

「鬼嶋先輩！いつの間に起きたんですか！」

「さっきだ！そんなことよりなんだこの写真は？」

「たぶん獄怨のやつらのものかと」

「許せん！殺す！殺してやるわあ！」

鬼嶋先輩から憤怒のオーラが放たれた。やばい。これは完全に人を殺るオーラだ。

「鬼嶋あ！いくぞお！」

「よっしゃあ！」

「無駄だ！この俺に勝てる奴などいない！」

「うるせえ！」

二人は物凄い勢いで神崎を挟み両腕を水平に上げた。は、早い！

「な、何をする気だ！？」

「プラス極！」

「マイナス極！」

『必殺！マグネガウスリアット！！』

「うはああ！！！」

二人の前と後ろからの両腕リアットに神崎はその場に倒れる。完全にやられたな。

「ふん！二度と妹に手をだすな！」

「ふん！二度と唯さんに手をだすな！」

こうして超最強タッグによって戦いは幕を閉じた。

帰り道。

「次は勝負パンツでいくからね！私にだって色気あるんだから！」

そう言い残して須藤の妹は兄と帰っていった。やれやれ別に勝負パンツ見たくないんだけどな。

「じゃあな永谷」

鬼嶋先輩も家路へとつく。気付けばもう夕方だ。まったくひどい目にあったな。むやみに外に出るもんじゃない。ってあれ？なんか用事があつたような気が・・・

「よう！ハリボテベンツ！」

「よう、秀」

この変な呼び方をするのは秀だけだ。

「あ！そういえばさっき唯先輩と彩子ちゃんがぐずってるの見たんだけど」

「・・・あー！ー！！」

俺は全力で走りだした。すっかり忘れてた！今日は買い物に付き合  
う約束してたんだっ！

商店街入り口。

時は既に夕暮れどき。唯先輩と彩子がベンチに座ってしょぼんとしているのを見つける。

「先輩！彩子！ごめん！」

「うう・・・けんちゃん？」

「ぐすつ・・・建人君？」

「ちよつと問題に巻き込まれて・・・」

「ふえーん！けんちゃんにほつとかられたあゝ」

「うわーん！建人君にほつとかられたあゝ」

「ちよ、ちよつと二人とも！」

結局ぐずる二人をなだめるのに三時間かかりましたとき。

episode 19 No.2の反逆！妹を奪還せよ！（後書き）

この話を投稿した時点で読者数が6000を越えました。読者の皆様に感謝です。さて、今回の話に出てくる須藤くんの技名の最後に付く『婆袈羅』。これは鎌倉時代に華美な格好や異様な様子のことをいう言葉として使われたものです。お婆さんではないですよ！

## episode 20 海と水着と先輩と

「先輩・・・もう我慢できません」

「けんちゃん、まだ出しちゃダメ」

唯先輩は俺を優しくさする。

「うう！先輩そんなにさすると出ちゃいます！」

「もうちゃつと我慢して！あとちよつとだけ・・・」

「せ、先輩！もう無理です！」

俺は今絶体絶命の状態にある。決して大人の階段を昇っているわけではない。

今、俺がいるのは大海原に浮かぶ船の上。そして物凄い吐き気に襲われている。隣では唯先輩が心配そうに俺の背中をさすっている。

先輩！それは逆効果だよ！・・・おえつ。

なぜ船の上か？ことの発端は先輩と彩子がこの前買った水着を披露したいと騒ぎだしたことだ。

まあそこら辺のプールで披露するのに付き合わされると思っていたのだが事態はこれを聞いていた恭子先輩の一言によって急変するのであつた。

『それでしたら真壁財閥で保有しています離島の別荘で披露ということはいかがでしょうか』

と言うわけで俺たちは真壁財閥保有のリゾート地へと向かうことになった。

そして現在。その離島へと向かっているのだが、ここでもうひとつ問題が発覚した。俺は船に弱かったのだ。

「大丈夫？けんちゃん？」

「な、なんとか・・・」

「おい！大丈夫か？『湿気たポップコーン』」

「永谷氏の身体に異常あります」

「永谷！唯さんに甘えるなあ！」

もうひとつの問題。それは唯先輩たちの他にも秀、博士先輩、鬼嶋先輩がついてきたことだ。これは誤算だったな。

「永谷様。間もなく着きますのでもうしばらくご辛抱を」

羊山さんが俺を気遣ってくれる。勿論この人も同伴だ。

「あ、あと何分くらいですか？」

「あと34光年くらいですかね？」

「・・・え？」

「あー！今のはジャーマニージョークだね？羊さん腕あげたなあ」

「お褒め頂き光栄です」

おえっ。意味わかんねえ。

「建人さん、そろそろ見えてきますよ」

恭子先輩が指差したその先に小さな島が見えてきた。今は小さく見えるが実際は大きいのだろう。

「それでは皆様、下船の準備をお願いします」

いよいよ到着だ。さてこの一泊二日のバカンスはどうなることやら・  
・・。

眞壁財閥別荘。

『すじ……』

一同開いた口が塞がらない。さすがは財閥だ、完全に平民離れた空間がそこにはあった。

「荷物は先に部屋に届けております。一人一室ずつ用意をしていますのでどうぞご自由にお使いください。では後程」

俺たちは用意された個々の部屋へと散る。俺の部屋は二階にあがって真っすぐいったとこの突き当たりを左に曲がりさらにその先を右に曲がってみえる12番目の部屋だ……って部屋遠っ！

赤いふわふわのじゅうたんが敷かれた部屋へと辿り着く。やっぱり部屋も豪華だ。軽く三人で寝れそうなくらい広いベッドに俺の身長  
の三倍はあるだろう大きな窓。ともかくスケールがでかい。

早速そのふわふわベッドに身を預けたかったのだがそういうわけには行かないようだ。

コンコン。ガチャ

恭子先輩だ。

「皆さんで今から海へ行きますから準備のほうよろしくお願いしますね」

恭子先輩は天使のほほ笑みで去っていった。先輩からの召集じゃ断れないな。

「水着、水着つと」

俺は準備を始めることにした。

---

照りつける太陽が一段と眩しい。ここは浜辺。離島の浜辺。ということで俺たちは今浜辺でビーチパラソルを立てている。

「永谷氏。こちらは終わりました」

「ご苦労さまです、博士先輩」

「いえ、では私は少し休ませてもらいます」

博士先輩はパラソルの下の椅子に座るとノートパソコンをいじり始めた。海来た意味ねえだろ。

「こっちも終わったぞ！」

「こっちもだ〜」

どうやら全部終わったみたいだな。さて、ここでみんなの水着チェックといこう。やっぱ気になるもんな。

まず秀は何故か真っ赤な花畑に骸骨が転がっているという不気味な柄だ。ん？下に小さく『惨劇のお花畑』と書いてあるな。

次に博士先輩。なんだか難しい数式が無数に書いてある。いかにも博士先輩らしいが見ていると気持ち悪くなってくる。

鬼嶋先輩のは真っ白なシンプルなものだ。ただ後ろに赤い文字で大きく『不良魂』と書いてあるのが気になるな。

俺はというと、まあ普通の黒い下地にラインが入っているっていういたって普通なものだ。

以上！・・・え？野郎に興味はない？女性陣は？残念ながらまだ先輩たちは着替え中だ。今はここで楽しみに待つことにしよう。

「よし、大橋！泳ぐぞ！」

「イエッサー！」

いつから仲良くなったのか秀と鬼嶋先輩は海へと走っていった。

しかし綺麗な場所だな。砂浜にはゴミは見当たらないし、海面も澄んでいて綺麗な。目を懲らして見てみると小さな魚がたくさん泳いでいる。

「綺麗だなあ・・・」

「建人さんっ」

振り向くと水着姿の恭子先輩が立っていた。

恭子先輩の水着は黄色のビキニで胸の真ん中に向日葵なんかの飾りがついている。見事に先輩の綺麗なスタイルを醸し出してるな。意外にも可愛い系が好きらしい。てか超可愛い。

「ど、どうですか？」

「似合ってますよ、先輩」

「よ、よかったです／＼」

恭子先輩は恥ずかしそうにはにかんだ。あ、やべ惚れそう。

「建人くん！」

向こうから彩子が走ってやってきた。

彩子の水着はピンクでフリル付きビキニだ。しかも特筆すべきは紐などこ。童顔の彩子なのに身体は意外にも幼くないらしい。胸の真ん中の小さなリボンが可愛いらしい。

「あ、彩子・・・紐？」

「う、うん。頑張っちゃったあ。変かなあ？／＼」

彩子は顔を赤らめながらもじもじしている。か、可愛い。

「いや、すごく似合ってる。可愛いよ」

「ホントに？私、嬉しい！もう建人君大好きっ」

彩子は突然俺の首に抱きついてきた。

ほわああああ！彩子の素肌がああ！俺に密着うう！ああ！この感

触はあ！彩子のおお！

「建人さん！大丈夫ですか」

「はあはあ。なんとか」

「ご、ごめんね。私嬉しくて／＼」

彩子は恥ずかしそうに離れる。うん、やっぱり可愛い。

「けんちゃん！」

今度は唯先輩が走ってくる。

唯先輩の水着は真っ白の紐ビキニ。胸のところにリボンが付いている。意外にもシンプルだが元気いっぱい先輩にはとても合っている。

ちよつとサイズが小さいのは狙っているのか発展途上の先輩の胸をより一層際立てている。う・・・可愛すぎて鼻血でそう。

「えへへ」似合ってるかなあ？／＼」

「は、はい。恐いくらい似合ってますよ」

「ホントに？サイズちっちゃいから・・・大きく見える？／＼」

「えーい、いえ俺は別に／＼」

「もう。けんちゃんのエッチ」

先輩は恥ずかしそうにはにかんだ。男なら誰だって気になる。それくらい唯先輩はスタイルがいいのだ。

これでとりあえず全員揃ったわけだ。こんだけ大人数いるのだから何かしたいものだが・・・。

「秀！鬼嶋先輩！一回こっちに来てくださいよ！」

海からあがった二人がこちらに走ってくる。

「なんだよ！つてうわー！水着めっちゃ最高！」

「おお！唯さんの水着が美しい！」

三人の美少女の水着姿に興奮する二人。まあ下手なアイドルより可愛いかもしれないな。

「せっかくだからなにかしよーよ！」

「なにかって？」

「うーん・・・僕スイカ割りしたい！」

「いいですね！」

「やろう！やろう！」

と言うわけでスイカ割りに決定。

「僕は画像の編集がありますので」

「そ、そうですか」

博士先輩はやらないらしい。一体なんの画像を編集しているのだろうか？

なにはともあれスイカ割りを始めたいのだが・・・肝心のスイカがない。

「スイカがないんじゃないですかね・・・」

「よし！今から作ろう！」

正気か！今から作ったらスイカ割りができるのは来シーズンだぞ！

「スイカなら別荘の向こう側で自生してるものがあるはずです。それをとってくれば・・・」

マジで？とってくるの？てか自生してるの？

「いや、建人を砂に埋めてスイカの代わりにした方が」

え？なにその処刑？抵抗できないじゃん！スイカ割りの刑ってか？

「なにかお困りのことでもございましたか？」

「あ、羊山さん！」

「羊さん！スイカ用意してよー！」

「スイカ？でございますか？少々お待ちください。すぐに手配致します」

よし。これでまあ安心だろう。

唯先輩が目隠しをしてふらふらしながら網目模様の球体に近づいていく。

「・・・あれって」

「・・・メロンだね？」

羊山さんが用意してくれたものはスイカではなくメロンだった。

「すいません。あいにくスイカを切らしてまして・・・アンデスメロンなので味に問題はないかと」

品種とか味の問題ではない気がする。

「スイカは英語でウォーターメロンですから」

そういう問題でもない気がするのだが。

「唯さん！そこです！」

「OK！源さん！とりやあ！」

べちゃ！

「やったあ♪当たったよ」

唯先輩はびよんぴよん跳ねて大喜びだ。

しかし肝心のメロンは割れたというより叩き潰された状態だ。やっぱスイカみたいにはいかないな。

「あーあ。あれじゃあ『メロンのミンチ』じゃん」

「秀、意味わかんねえ」

せつかくのアンデスメロンなのでおいしく食べた。ぐちゃぐちゃだがなかなかイケるもんだな。

「さあて次は何を割ろうかなあ」

え？まだ割るの？

先輩は次なる獲物を探しはじめた。てかフルーツは叩き潰すものではないような気がする。

「唯ちゃん、フルーツよりもせつかくですから皆さんでビーチバレーしましょうよ」

「・・・ビーチバレーに賛成！」

というわけで今度はビーチバレーをやることに。

チームわけは一年対二年。博士先輩は審判だ。一応こっちのほうが多いのだが向こうには豪腕の鬼嶋先輩がいるからなあ。しかも唯先輩の前ではりきってるし。

「尚、試合中に三回ミスしますと僕が集めた恥ずかしい写真を公開しますのでよろしく願います」

勝手になんかルール増やしてるー！

「さらに三回ミスすると主人公がこの大橋秀に変更されます」

え？マジで？まさかの主人公のコンバート！？

「では、始めっ！」

試合はというとなかなかいい勝負。意外と運動神経がいい恭子先輩

と唯先輩がうまい具合に鬼嶋先輩にトスをあげ強力なスパイクが飛んでくる。

それらをひたすらレシーブ。これは持久戦になりそうだな。そしてついに二年チームがマッチポイントに。

サーブが飛んできた。俺がレシーブして、彩子がトスをして・・・

「秀！スパイクだ！」

「おうよ！」

そういうと秀はとげとげの付いた靴を思いっきりボールにぶつけた。

ぱあんっ！

ボールが粉碎する。

「あれ？」

違う！スパイクの意味が違うつての！それは陸上競技に使う靴だ！てかどこから持ってきたんだ！

「てへ、間違えちゃった」

「二年チームの勝利！尚、ボールを粉碎した場合恥ずかしい写真をばらまきますので」

博士先輩は鞆の中から大量の写真を取出し・・・ばらまいた。

「のわあ！やめて〜」

急いで回収を始める秀。写真の内容は人権侵害になりそうなので言

わないでおこう。

「やれやれ。バカやってるからだ」

「ねえ、建人君。あの写真に建人君が写ってるよ？」

「・・・え？」

「あ、すいません。間違えて長谷氏のもまいてしまいました」

うわ！俺のもばらまかれてるよ！

俺も急いで回収するのであった。

つづく！

episode 20 海と水着と先輩と（後書き）

ちよっといやらしい話になってしまいました。 汗 不快に感じた  
方いましたらすいません。

episode 21 先輩と洞窟探検

博士先輩の羞恥写真騒動から2時間後。

もう夕暮れ時だ。ここからの景色なら海に沈む太陽が見えだろうと思った俺は一人黄昏中。みんなはそれぞれしたいことをしたいようにやっている。

「ふう・・・疲れたな」

「けーんちゃん」

「あ、唯先輩」

いつのまにか来た唯先輩が俺の隣に座った。

「うわぁ！ここからの景色すごく綺麗だねっ」

俺たちがいるのは浜辺にある岩のゴロゴロと転がっている場所。その岩の上にすわっているというわけなんだがよく先輩はここに気付いたな。

「ねえ！地平線ってなんで曲がって見えるか知ってる？」

「そりゃあ地球が丸いからじゃないんですか？」

「なーんだ知ってるんだあ」

「まあ、それくらいなら」

まったく何を言いたいのかわからない。が俺には先輩が寂しそうに見える。

「なんか夕日って寂しいよね？」

「そうですか？俺は好きですよ、黄昏って」

「僕はダメなんだよなあ。すごく切ない気持ちになるから」

先輩はより一層寂しそうな顔をする。一体どうしたんだ？

「僕のお母さんの実家からは綺麗な夕日が見えるんだよ」

「はあ」

「ホントに綺麗な夕日だね」

明らかに先輩の様子がおかしい。なんか変なものでも食べたのか？いや、何か理由があるはずだ。

「あの、先輩。なにかあったんですか？」

「え？・・・あのね」

『唯ちゃん！建人さん！そろそろ別荘に帰りますよ』

恭子先輩の声で会話は途切れてしまった。

「よし！行こつ？」

「先輩、でもまだ・・・」

「早く〜」

先輩は身軽に岩から下りるといつもの屈託のない笑みを浮かべて走っていった。

「・・・変な先輩・・・」

まあ今に気付いたことでもないな。俺も岩から下りるとみんなの元へと向かった。

別荘の食堂。

オレンジ色の照明で照らされた部屋はなんだかリッチな感じがする。目の前の大きな机には次から次へと見たことのない料理が用意されていく。

「なんだか凄い料理ですね？」

「はい。和洋折衷なんでも作れる五つ星シェフとイタリアで店を9つ経営するパティシエを呼びましたからね」

なんだか現実離れた話だな。恭子先輩にとっては普通なのだろうが。

「食材とかもやっぱり凄いですかね？」

「食材は島民から金で巻き上げたものでございます」

「・・・え？」

「もう。羊山さんつたらご冗談が上手なんだから」

「今のはサディストジョーク。通称SJでございます」

わからん！ジョークの見極め方がさっぱりわからん！

なにはともあれうまい料理に舌鼓をうつ。ふつ々に食べたら破産しそудな・・・。

「夜だよ！」

「夜ですね！」

「夜だ！」

料理を食べ終わった途端唯先輩たちは立ち上がった。

夜？確かに夜だがなにかあるのだろうか

「羊さん！頼んどいたあれある？」

「はい。一級品のものを用意致しました」

羊山さんが不気味な笑みを浮かべた。あれってなんだろうか？

「先輩・・・あれってなんですか？」

「あれだよっ」

「いやだから・・・」

「皆様！あれの準備ができました」

羊山さんが庭から俺らを呼ぶ。ここまで『あれ』を引っ張られると  
うざいな。

「わーい！あれだー！」

この人はわざと言ってんだな。絶対そうだ

さて、あれとは一体なんのことなのだろうか？絶対ろくでもないもの  
のだろうか・・・

「先輩・・・これ・・・なんですか？」

俺の目の前に何やら『探検隊』というキーワードによく当てはまる様々な道具がごろごろ転がっている。

「なんだか嫌な予感がするんで先にベッドで休ませてもらいます」  
「ダメだよー。僕たちはまだベッドの上の関係じゃあ・・・」

「け、建人君・・・せ、先輩と！？私・・・」

「な！？彩子？違うんだ！俺はただベッドで休みたいだけで！」

「永谷・・・てめえ・・・クロス・ブックロス」

「いやあー！鬼嶋だけに鬼みたいな目でこっち見ないでくださいっ  
！」

「にぎやかで建人さんがいると楽しいですわ」

「頑張れー」『明後日の一昨日』」

それは今日のことだあああああ！

つて冷静につつこんでる場合じゃない！このままでは彩子の信用が  
た落ち、さらに番長死刑執行endが待ってるじゃないか！

「先輩！ちゃんとしていきますから！だからこの誤解を早く解い  
てくださいよー」

「それでよろしい」

先輩のフォローでなんとか事は収まった。まったく！幼い顔して言  
うことがとんでもないから唯先輩は困るよな・・・。

「よし！役者は揃ったね」

「それでこないかにも探検しますみたいな道具用意して一体どうするつもりですか？」

「探検」

「……」

やばい、夏の日差しに頭をやられたのだろうか急に頭がいたくなってきたぞ。

「えっと……これを何に使うんですか？」

「た・ん・け・ん」

「……あの、探検……ですか？」

「そうだよ！」

マジですか？？てか普通探検なんてしくない？あんたもう高校二年生でしょ？

「よし、じゃあまずは班分けだね」

「ちよつと待ってください！探検ってことはどこかに行くんですね？」

「うん、当たり前じゃん」

「そ、それってどこに行くんですか？」

俺は恐る恐る先輩に質問してみた。

「洞窟だよ」

洞窟？それってあれか？よく勇者様がレベルアップのためによく入

つていくあの穴か？

「洞窟なんてそんな危ないところ・・・」

「でも洞窟なんてなんかおもしろそう。ね？建人君？」

「唯ちゃんはこのいうの大好きですからね」

うわー。意外と女子陣は行く気満々なのね・・・。てか洞窟なんて  
どという発想だよ？

「おもしろそうじゃん！先輩俺も行きますーす」

「唯さんが行くなら俺もついて行かなければな」

「私はこの『スケスケスコープ』が暗闇でも使えるのか実験も兼ね  
て行きたいですね」

秀たちもどうやら賛成のようだ。こうなったら仕方ない一人だけ行  
かないわけにも行かないしな・・・。

「わかりました。俺も行きますよ」

「よし！それじゃあ羊さん、洞窟まで案内して！」

「かしこまりました」

こうして俺ら一行は別荘から少し歩いたところにある洞窟へと向かう  
ことになった。なぜにこんなにゾートに来て洞窟なんて入らなきゃ  
ならないのか・・・。

洞窟前。

俺の目の前には今大きな暗い穴がある。中からはなんとも言えない空気が流れてきている。

「ここが伝説の海賊がアジトにしていたと噂される洞窟です」

「海賊ー」

唯先輩は目をキラキラ輝かせている。

「海賊のアジト？」

「そうです。その昔、琵琶湖を我が物にした大海賊です！」

やべえよ。海ってか湖じゃん。それ海賊じゃないし。てか琵琶湖なんて手に入れても仕方ないって。

「しかし、琵琶湖を手中にしたその日。海賊たちは不幸にもこの洞窟の中で落盤にあい死んでしまったのです」

「・・・」

全員羊谷さんの話に聞き入っている。てか琵琶湖に関してはマジらしい

「そして今でも無念のあまり彼らの亡霊が洞窟内を彷徨ってるとか・・・・」

「イヤダナ、ソナノイルワケナイジヤナイ」

「ちよっと！先輩片言になってますよ！」

「うう。なんだか怖いよー」

なんだかよくわからないがこの洞窟は心霊スポットらしい・・・。

「あの・・・先輩？やっぱり入るんですか？」

「ここまで来たらもう引けないよ！」

まだ洞窟前なのですが・・・。

唯先輩は何が何でも行くらしい。仕方ない、ここは少し揺さぶってみるか。

「先輩いいんですか？中には何がいるかわからないんですよ？」

「・・・いないかもしれないじゃん」

「でももしいたらどうするんですか？」

「・・・む」

先輩の表情が少し変わった。これはチャンスだな。

「たとえば刃物を持った骸骨が追っかけてきたり、おおきなコウモリや毒蛇に襲われるかもしれないよ？」

「ひっ！だ、大丈夫だもん！」

「もしかすると黒くてカサカサと高速移動するあれが大群で襲ってくるかも・・・」

「いやああああ！台所の残り物に近づかないでえええええ」

先輩の恐怖がオーバードライブしたらしい。次の瞬間、何を思ったか唯先輩は突然恭子先輩の腕を掴むと洞窟の中に飛び込んで行ってしまった。

「先輩！？てか道連れしちゃダメですよ！」

「ラップはちゃんとかけてえええええ！」

「唯ちゃん？唯ちゃんてばあ！」

先輩はもの凄い勢いでいつてしまったようだ。もう見えない・・・。

「お嬢様あああ！」

「恭子先輩・・・ご愁傷様」

「秀！勝手に殺すな！」

先輩を怖がらせて中止にするつもりが・・・最悪だ。

「唯さん！唯さああん！」

「中川氏が生きて帰ってくる確率は・・・」

「ちよつと！何言ってるんですか！とりあえず待つてればなんとかそのうち帰って・・・」

『いやあああああああああああ！』

洞窟の中からこの世の終わりのような声が聞こえてくる。

「建人君？これって？」

「・・・そんな、まさか何かあったのか？」

でもあの唯先輩だ。無駄に生命力が高そうだしきっと大丈夫なはず・・・。

「くっ！こんな時に俺が洞窟脱出の呪文を唱えられれば・・・」

うわー。なんかRPGの話になってるよ。てかそんな呪文あるわけないって！

「はっ！そういえば旦那様の書齋に『友人が洞窟に迷ったら』という専門書があったような！」

いらねえよ！そんな専門書誰が悲しくて買っただよ？てかなかなかこんな状況ないし！

「しかし、あの本は全十巻だったはず・・・」

なげえよ！そんなに詳しく何を説明するんだ？どんだけ友人が洞窟に迷ったときに関する知識があるんだよ？

「と、ともかく！誰かが様子を見に行くしかないだろ？」

「おおっ！永谷様！お嬢様を助けてくださるのですね！」

「建人君、かつこいいゝ頑張つてね！」

「へ？俺が行くの？」

「こつというのは言い出しつぺが行くんだよ」

「ちよつと！なんで俺が！」

「永谷！唯さんを頼んだぞ」

「永谷氏。期待してますよ」

「・・・まじ？」

「唯せんぱーい。恭子せんぱーい。いるんなら返事してください」

薄暗い洞窟の中を明かり一つで俺は進んでいる。

「はぁ……。なんで俺が二人を捜さなきゃならないんだか」

結局俺はみんなの横暴で先輩たちをさがす羽目になったのだ。

洞窟の中は気持ち悪いくらい静かでじめじめした空気が漂っている。確かに何かいそうな雰囲気だ。

「さすがに気味悪いな……。早く見つけるか」

まったく唯先輩ってなんでいつもこうトラブル起こすんだよ……。まあ確かに静かな先輩とか想像なんてできないけど。それにしたってもうちょっと先輩らしいことしてくれてもいいのに……

ごっつ！

「いてて……」

よそ見をしていたら頭を打ったようだ。

「くそー。一体何だよ？」

どうやらここから道が二手にわかれているようだ。

「……嫌な予感がするな……。まあ迷った時は左だな」

こんなところで迷っても仕方ない早く進まなきゃな。

俺は左側の道をしばらく歩く・・・歩く・・・歩く

「おーい！先輩！いないんですかぁ？」

「・・・け、建人さん？」

前のほうから声が聞こえる。この声は・・・

「恭子先輩？」

「建人さん！よかった来てくれたんですね？」

恭子先輩は地面に座り込んでいる。こんな真っ暗なところに一人なんて怖かっただろうに。

「先輩！大丈夫ですか？」

「はい、私は・・・痛っ」

「先輩？怪我してるんですか？」

「少し足を挫いてしまっ」

どうやら唯先輩に引つ張られてたのでうまく走れなかったらしい・・・。  
。そういえば！

「あー！唯先輩は・・・どこに」

「唯ちゃんは・・・途中ではぐれてしまっ」

「そんな・・・」

はぐれると言ってもここは今のところ迷うようなところはないし・・・。

「と、とりあえず立てますか？」

「・・・な、なんとか・・・！痛っ！」

恭子先輩は再びその場に倒れ込んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「は、はい。あの肩を貸していただけませんか？」

「え？あ、はい」

恭子先輩の体が俺にもたれかかる。ほわぁ・・・恭子先輩ってなんだからいいにおいがするなぁ・・・。

「どうしたんですか？顔を赤くして？」

「え？あ、いや！なんでもないです！」

「むー・・・」

恭子先輩の顔がぐつと俺に近づく。いけない！そんなにちかくに顔があるのはあ！またいいにおいしてきたー！落ち着け！落ち着くん  
だ俺！

「と、と、ともかく！早く先輩を捜しに行きましょう」

「変な建人さん・・・」

暗い洞窟の中に男女が二人歩いている。しかも寄り添うようにして。そして男は盛りのついた男子高校生。女は超美人の令嬢さん。さつきからいいにおい・・・。

「……」  
「……」

気まずい……。非常に気まずいな。案外二人きりになると話に困るものだ。そしてこの状況……。なんとか会話をしなければ

「……あ、あのー」

「へ？な、なんですか？」

「唯先輩はなんで恭子先輩を放つてどっかに行っちゃったんでしょ  
うか？」

「唯ちゃん怖がりだから……。上から落ちてきた水滴とこうもりに  
びつくりして……。それで驚いた勢いで」

「さらに加速して洞窟の奥に行つたと？」

「はい」

先輩はアホの子だったんですね。

「確か『大海賊サチ・ウスイの宝は私のもの』とか言ってたよう  
な……」

大海賊なのにサチ・ウスイ……。そんな名前だから琵琶湖を手  
中にしてすぐに事故にあつたんじゃないか？

「まったく何をやってるんだか……」

「……」

「恭子先輩？」

「あの……。建人さんは……」

「なんですか？」

急に恭子先輩は顔を赤らめてうつむいた。

「唯ちゃんのことを・・・」  
「・・・?」

その時だった急に恭子先輩の体がぐらついた。

「なっ!? 危ない!」

俺は恭子先輩をかばうようにして倒れる。するとちょうど先輩が俺に覆い被さるように・・・

「いててて・・・ってうお!？」

「け、建人さん・・・足がもつれてしまつて・・・」

いけません! いけませんよお! このなんとも言えない体の密着感はあるああ! てか何この倒れ方? 危ないよ! まさか? 一夜の恋? トリップカード『一夜の恋』発動ですかああ!

「あ、あの? せ、先輩?」

「はあ・・・はあ建人さん・・・」

ちよつと! 何? 何でこの人息づかい荒いの? ちよつとまずいつて! そんな耳元で! そんな甘い吐息はああああ!

「せ、せ、せ、先輩!? とりあえず立ちませんか?」

「はあ・・・なんだか・・・はあ・・・体に力が入らなくて・・・はあ・・・」  
「

恭子先輩はぐつたりとしてさらに俺にぴつたりとくつついてくる。

「お、お、落ち着いてください！」

「はぁ・・・はぁ・・・」

まずい！もう限界だ！いろんな意味で限界だぁぁぁ！理性がぁぁぁ！俺の越えてはいけない何かがぁぁぁぁ！

「おーい！どこだ『明後日の一昨日』！」

「お嬢様ー！永谷様！」

意識がもうろうつとするなかで秀と羊谷さんの声がする。ついに幻聴が・・・てかなんでこの二人なんですか？

「おーい、けんちゃんー！」

「・・・あれ唯先輩？」

薄れた意識がだんだん現実へと戻される。

「ゆ、唯先輩？それに秀に羊谷さんも！よかった！無事だったんですね」

「・・・けんちゃん」

「・・・建人・・・」

「永谷様・・・」

なんだかみんな冷たい目をしている。

「ちょっとどうしたんですか？そんな獣を見るような目をして・・・」

はっ！俺は気づいた。気づいてしまった。今俺の身にぴったりとくつついてなんだか息づかいを荒くしてる御方がいることに……。

「えっと。誤解！誤解なんだよこれは！俺は何にも」

「けんちゃんのけだものー！」

「ぶっ！」

俺の弁明もむなしく唯先輩の手の平が俺の頬を打つ。

「こ、これにはわけが……」

「撮る！撮る！撮る！撮るううう！」

うわ！なんだか勝手に写真撮りまくってるし！ちよっと！何そのスキャンダルみたいの！？

「みんな聞いてくれ！これには山よりも高く谷よりも深いわけが！」

「こおおおおおおああああああ」

いやああああ！羊谷さんなんか構えてるよ！長い鉄でできた刃物を構えてるって！てか何？その『こおー』っていう気みたのはあああ！？

「羊谷さん？話せばわかります！だから……」

「お嬢様に手を出す下衆が！その命ここで絶たせてもらっていますぞ  
おお！」

「ちよつと？あのいつもの冗談ですよ？何を振り上げてるんです  
か？え？何その体から出てる変なオーラは？ちよつと唯先輩？何笑  
つて見てるんですか？え？あの・・・」

「ぎゃあああああああああ」

後日、俺は体を包帯にくるまれながらみんなに事情を説明した。後  
から聞いた話だと恭子先輩は少し熱があつたようだ。さらにあの洞  
窟は中が繋がっていて唯先輩は一周して一人で出てきたそうだ。

「まったく。けんちゃんはおさるさんなんだから」

「ひどいですよ先輩。あのとき止めてくれればよかったのに」

「あはは、あの時のけんちゃんの表情はおもしろかったな！」

「表情？」

「うん！なんか幸福と地獄を味わった顔かな？」

「・・・」

今日も病室の窓から見える空は青いです・・・。

episode 21 先輩と洞窟探検（後書き）

私事により長い間放置してしまいました。大変申し訳ありません。  
これからは定期的に更新していこうと思いますので何卒よろしくお  
願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2333b/>

---

せんぱいっ！

2010年12月18日17時31分発行